

京都府埋蔵文化財情報

第 22 号

ゲンギョウの山古墳群の発掘調査	三好 博喜	1
舞鶴市志高遺跡第7次の発掘調査(A・B地区)	肥後 弘幸	8
—昭和61年度発掘調査略報—		16
6. 田 辺 城 跡	9. 蒲 生 遺 跡	
7. 綾 中 遺 跡	10. 長岡京跡左京第151次	
8. 上 中 遺 跡	11. 長岡京跡右京第240次	
資料紹介 狐谷7号横穴墓から出土した「車輪文叩き目」 のある須恵器について	田代 弘	26
谷内遺跡出土の木製穂摘具について	藤原 敏晃	31
府下遺跡紹介 34. 宇治隼上り瓦窯跡		33
長岡京跡調査だより		36
センターの動向		43
府下報告書等刊行状況一覧		45
受贈図書一覧		50

1986年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1) 貼石のある方形周溝墓 1号墓(左)・2号墓(右)



(2) 1号墓東側コーナー部

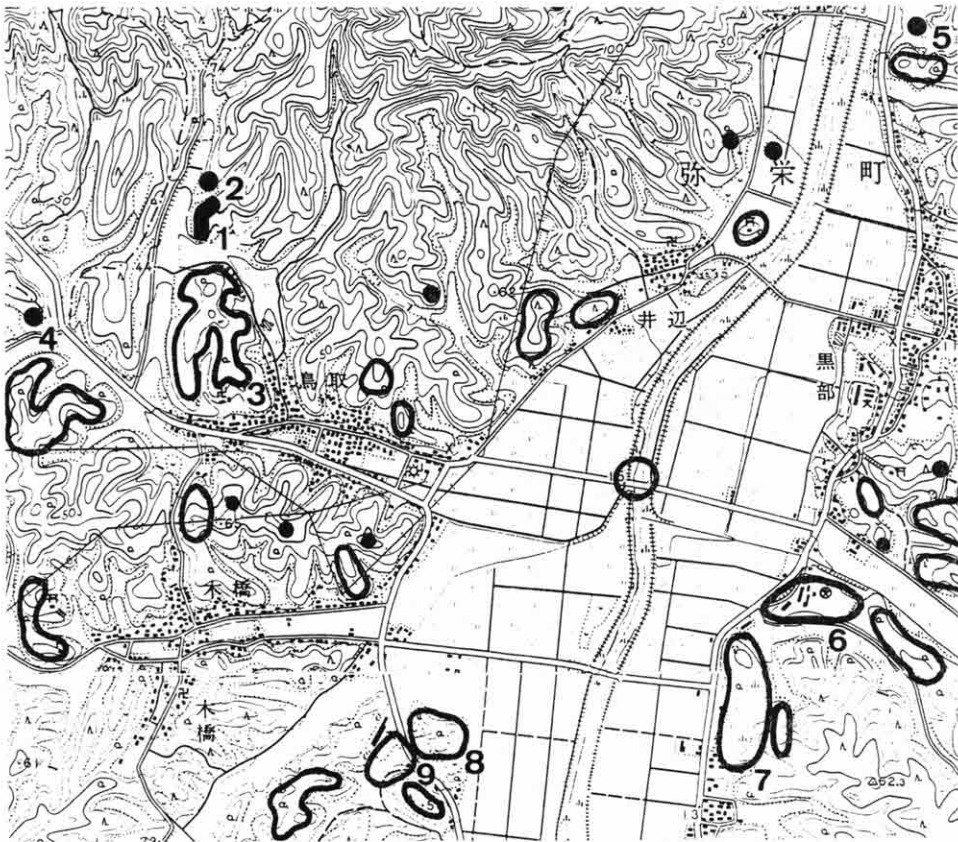
ゲンギョウの山古墳群の発掘調査

三 好 博 喜

1. はじめに

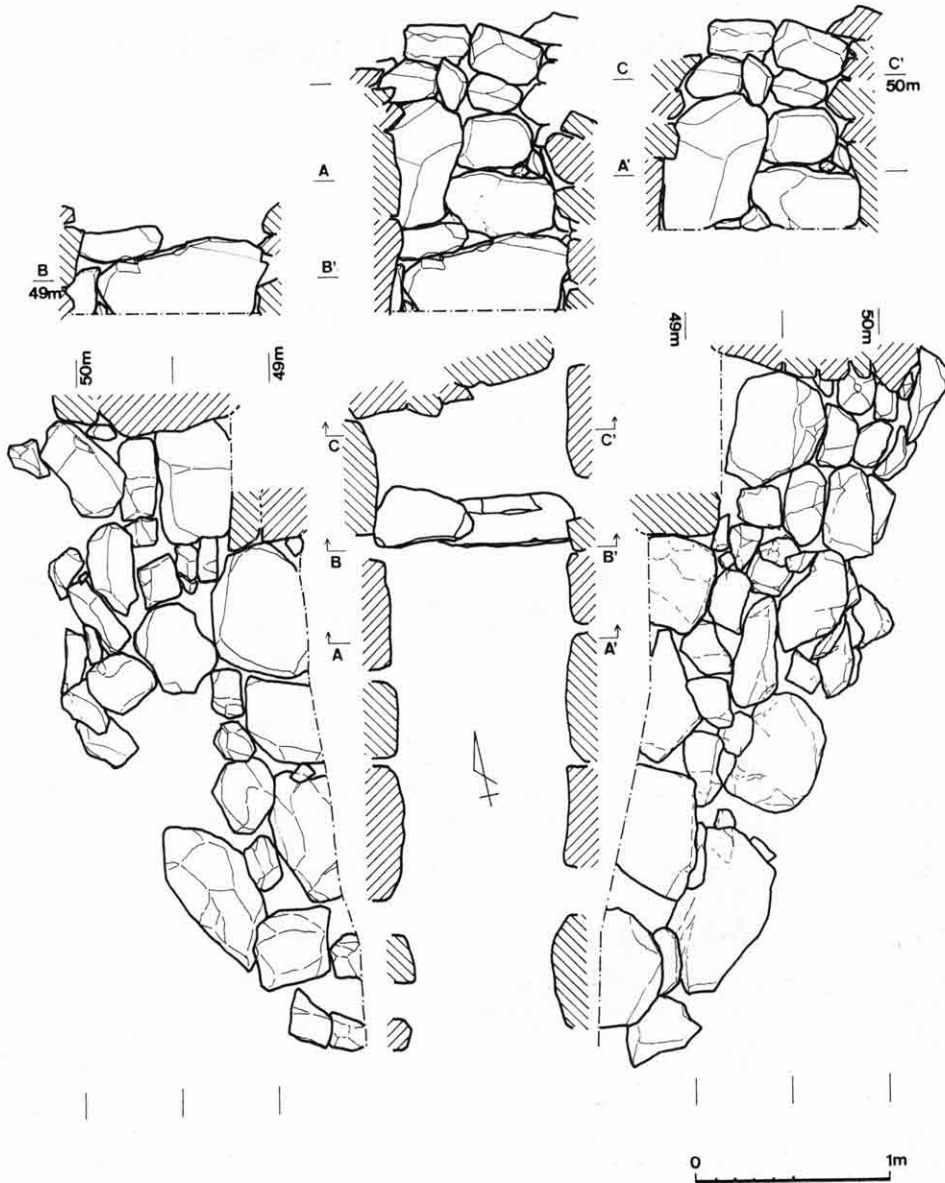
ゲンギョウの山古墳群の発掘調査は、丹後国営農地東部地区開発事業のうち、鳥取2・3団地の造成に伴い実施したものである。

ゲンギョウの山古墳群は、京都府竹野郡弥栄町鳥取小字涼堂に所在する。丹後半島の中央西寄りにあたり、半島を縦断して流れる竹野川の西側にあたる。地形的には網野・丹後・弥栄町の三町境に位置する山塊から樹枝状に派生する尾根の南側末端部にあたり、標高



第1図 調査地位置図 (1/25,000)

- 1. 調査地・ゲンギョウの山古墳群
- 2. 石穴古墳
- 3. 宮の森古墳群
- 4. ニゴレ古墳
- 5. 黒部銚子山古墳
- 6. 奈具遺跡
- 7. 奈具岡遺跡
- 8. 坂野遺跡
- 9. 坂野丘遺跡



第2図 ゲンギョウの山1号墳 横穴式石室実測図

60m余りを測る低位丘陵上にある。周囲の平地との比高は25m程度である。

ゲンギョウの山古墳群の位置する丘陵の北隣の丘陵端には横穴式石室を内部主体とする石穴古墳があり、南側に対峙する独立丘陵上には5世紀から6世紀前半にかけて築造された宮の森古墳群^(注1)がある。また、南に位置する鳥取の集落を経て網野町に抜ける谷筋にはニゴレ古墳^(注2)が存在する。ニゴレ古墳は中期の古墳で、円筒埴輪や各種の形象埴輪、衝角付冑

や短甲、頸甲といった武具や鉄剣、鉄鏃など豊富な遺物が出土している。谷筋を抜けて網野町に入るとそこには日本海最大の規模を誇る前方後円墳・網野銚子山古墳が控えている。

ゲンギョウの山古墳群では、当初横穴式石室墳1基を含む5基の古墳の存在が知られていたが、今回の調査に伴い10基からなる古墳群であることを確認した。このうち、造成に係る8基の発掘調査を、昭和161年6月4日から同年10月2日までの期間で行った。

なお、昭和47年度版『京都府遺跡地図』では、横穴式石室墳に「安田古墳」の名称が与えられているが、ゲンギョウの山古墳群と同じ丘陵に存在することから、「ゲンギョウの山古墳群」として一括し、今回古墳名称の整理を行っている。

2. 横穴式石室墳

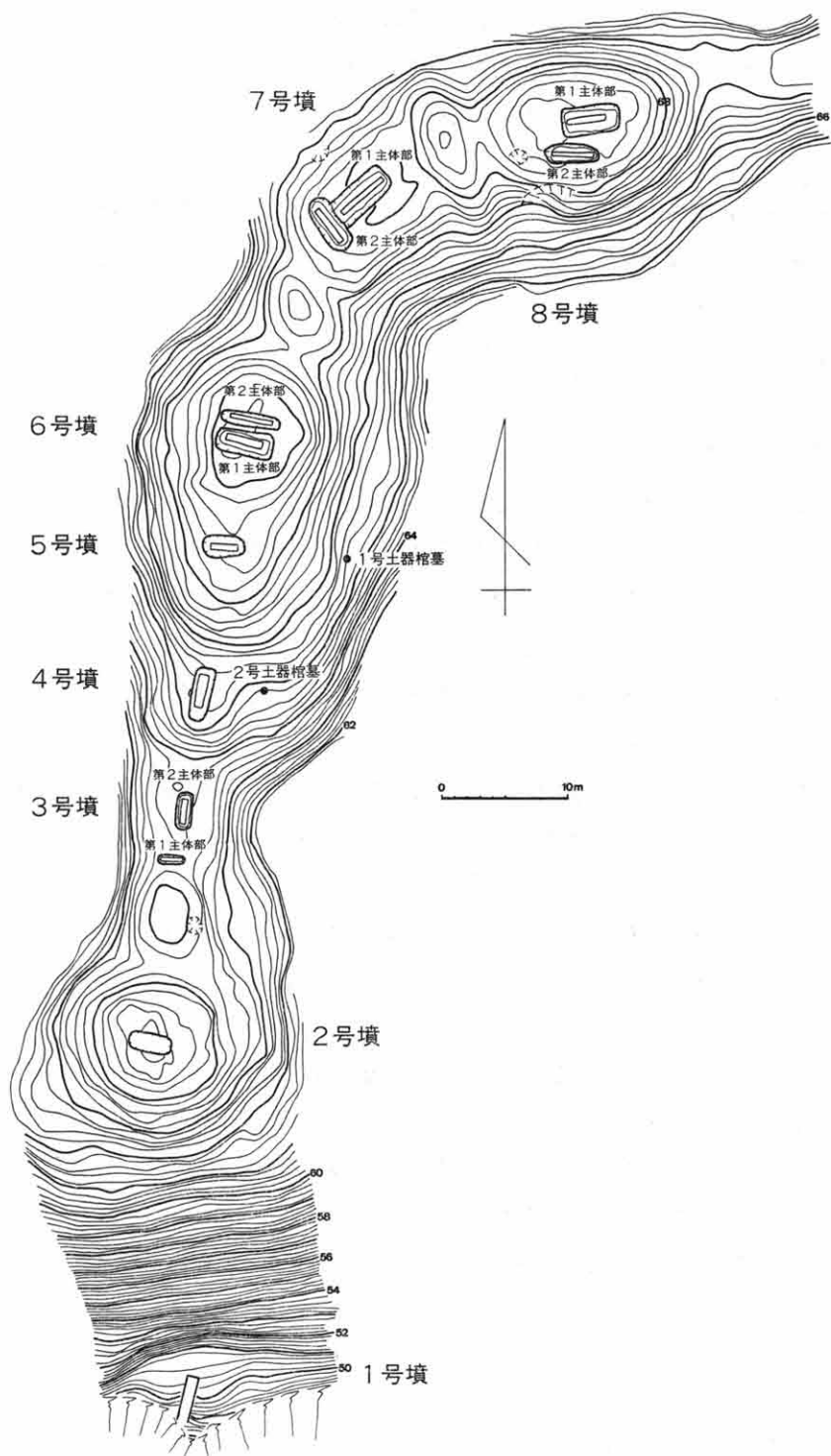
ゲンギョウの山1号墳(旧称安田古墳)は、丘陵南斜面の中程にあり、標高はおよそ50mを測る。斜面をテラス状に切り出し、古墳を築造したものと思われる。封土は流失しており、半割された天井石2石が露出していた。したがって、墳形は明確ではない。また、石室の前面は崖となっていたため、石室の先端部が崩壊している可能性もある。

調査は、表土を剥ぎ、現位置を保っていなかった天井石の残欠を除去したのち、石室内を充填していた土砂や転落石を順次排除して行った。

調査の結果、ゲンギョウの山1号墳の内部主体である横穴式石室は、奥壁部を一段せり上げるような形で構築された壇構造をもつことが判明した。石室は、全長3.7m以上・幅約0.9mを測る無袖式の横穴式石室で、高さは1.3m程度になるものと考えられる。壇部分は、奥行0.7m～1.0m・幅約1mを測り、壇の高さは床面から約0.4mである。壇の上面には炭化物混りの灰層が5cm程度載っており、刀子が1点出土した。遺物は刀子2点と金環1点だけで、土器類は出土しなかった。

ゲンギョウの山1号墳のような石室構造をもつ横穴式石室墳は、京都府与謝郡野田川町石川の高浪古墳^(注3)に類例を求めることができる。高浪古墳の内部主体は両袖式の横穴式石室で、全長7.8m以上・玄室長4.6m・玄室幅2m・羨道長3.2m以上を測る。壇部分は、奥行1.1m・幅1.9m程を測り、壇の高さは床面から0.9mである。

ゲンギョウの山1号墳と高浪古墳とを比較すると、ゲンギョウの山1号墳は高浪古墳のほぼ半分の規模をもつ。壇部分の構造では、高浪古墳が壇上面にも水平に板石を置き、地山面を被覆しているのに対し、ゲンギョウの山1号墳では壇上面に板石を置いていないため地山面が露出する構造となっている。また、高浪古墳では比較的大型の石材を用いて規則的な壁体を構築し、床面にも人頭大の礫を敷きつめている。これに対して、ゲンギョウの山1号墳では不定形な自然石を用いて壁体を構築しており、床面にも石敷を施していな



第3図 地形測量・遺構配置図

い。以上の比較を総合すると、ゲンギョウの山1号墳にはかなりの省力化が認められ、6世紀後半期の築造とされる高浪古墳よりも後出的要素が顕著である。

また、ゲンギョウの山1号墳と同程度の規模をもつ横穴式石室を京都府北部地域に求めると、福知山市正明寺に所在した向野西12号墳(石室全長4.6m・石室幅0.83m)、同15号墳(石室全長3.9m・石室幅0.9m)^(注4)などがあげられる。いずれも無袖式の横穴式石室で、古墳時代終末期に属する古墳である。

以上のような所見から、築造年代を示す出土遺物のなかったゲンギョウの山1号墳の築造時期を推測すると、古墳時代終末期という時期が与えられるものと思われる。

3. 木棺直葬墳

尾根上には、長さ150m程の間に9基の古墳が並ぶ。このうち、7基が調査の対象となった。基本的には、いずれも尾根を切り出して墳丘を成形した木棺直葬墳である。したがって、2号墳と3号墳との間、6号墳と7号墳との間および7号墳と8号墳との間にみられる小規模な隆起は、主体部が認められなかったことをも勘案すると、各墳丘の構築に際して切り出された残丘と考えられる。

ゲンギョウの山2号墳は、丘陵の先端部を占める円墳で、径12m・高さ1.5m程を測る。主体部は1基で、長さ3.4m・幅1.5m程の墓壇をもつ。棺の痕跡は検出できなかった。墓壇の北寄りからは、長さ約1.1mの鉄製直刀が出土している。

3号墳から6号墳は、階段状地形を呈する古墳群である。

最下段に位置するゲンギョウの山3号墳は、長辺9m×短辺5m程度の方墳で、高さ約0.5mを測る。2基の主体部を検出した。長さ2.3m×幅0.6mを測る第1主体部の墓壇内からは、砥石と土師器片とが出土した。第2主体部は、長さ2.8m×幅1.3mの墓壇をもつもので、木棺相当部の大きさは長さ2.1m×幅0.5mである。遺物は、墓壇上から土師器(高杯・壺)、棺内から管玉6点が出土した。

ゲンギョウの山4号墳は、一辺8m程の方墳で、高さ1.5mを測る。主体部は1基で、長さ4.3m×幅1.6mを測る墓壇をもち、木棺相当部の大きさは長さ2.7m×幅0.9mである。鉄剣と鉈・土師器片が出土している。

ゲンギョウの山5号墳は、長辺15m×短辺13m程の方墳で、高さ約1.8mを測る。主体部は1基であった。墓壇は長さ3.3m×幅1.8mを測り、木棺相当部の大きさは長さ2.4m×幅0.5mである。棺内西端からU字状に折り曲げられた鉄剣が出土した。

最上段に位置するゲンギョウの山6号墳は、一辺13m程の方墳で、高さ約2mを測る。6号墳では2基の主体部を検出した。長さ4.6m×幅2mの墓壇をもつ第1主体部では、長

長さ3.1m×幅0.5mを測る木棺相当部を確認し、鉄剣と鉄斧のほか鉄製品若干を検出した。長さ4.7m×幅1.1mの墓壇をもつ第2主体部では、長さ3.1m×幅0.4mの木棺相当部を確認し、不明鉄製品1点を検出した。なお、両墓壇上からは、高杯を主体とする土師器が比較的多く出土している。

ゲンギョウの山7号墳は、長辺12m×短辺10m程の方墳で、高さ約1mを測る。7号墳では切り合い関係をもつ2基の主体部を検出した。先に埋葬された第1主体部は、長さ5.5m×幅2.5mというゲンギョウの山古墳群のなかでは比較的大きな墓壇をもつ。木棺相当部も長く、長さ4.3m×幅0.5mを測る。棺内からの出土遺物はみられなかったが、棺上には土師器の壺形土器が据えられていた。第1主体部の南端を切り込む状態で造られた第2主体部は、長さ4.6m×幅2mの墓壇をもつ。木棺相当部の大きさは長さ3.4m×幅0.5mを測る。棺内からは鉄斧が出土している。

ゲンギョウの山8号墳は、長径19m×短径14mの楕円状の墳丘をもつ。高さは1.5m程である。8号墳では2基の主体部を検出した。第1主体部は、長さ4.6m×幅2.2mの墓壇をもつもので、長さ3.1m×幅0.5mの木棺相当部を検出した。第2主体部は、長さ4.1m×幅1.5mの墓壇をもつもので、長さ3.7m×幅0.4mの木棺相当部を検出した。いずれの主体部でも、遺物の出土をみなかった。

4. 火葬墓および土器棺墓

ゲンギョウの山古墳群の調査に伴い、火葬墓4か所・土器棺墓2か所が確認できた。

4基の火葬墓は、1号墳のあるテラス状の地形を利用して造られたものである。いずれも径0.5m・深さ0.3m程度の土壇内に火葬骨や灰・炭などを埋納したものであり、墓壇上には石組を配置していた。

土器棺墓は2基ともに土師器の壺形土器2個体を合口にし、主容器となる壺の口を北側に向けて横位の状態で埋納したものである。墓壇の掘形は確認できなかった。また、壺内からの出土遺物もみられなかった。

1号土器棺墓は、6号墳東側裾部の傾斜が緩やかになるテラス状地形の近くに存在した。主容器となる土師器は、器高約50cm・口径約25cmで、山陰地方に多くみられる二重口縁の壺形土器である。4号墳東側の斜面に位置する2号土器棺墓も同様で、主容器となる土師器は、器高約80cm・口径約30cmを測る山陰系の壺形土器であった。

5. おわりに

今回のゲンギョウの山古墳群の発掘調査では、木棺直葬墳7基およびこれに伴う主体部

11基と横穴式石室墳1基、火葬墓4基、土器棺墓2基の調査を行った。

このうち、横穴式石室墳については、京都府下では2例目となる壇構造をもつ石室であることが判明した。通常の石棚付石室とは異なる構造をもつことから、これと区別して雛壇付石室とでも呼ぶべきであろう。壇の用途については、高浪古墳の所見に埋葬施設の棺台という説があげられている。ゲンギョウの山1号墳の例では、壇部分の広さが一辺1mにも満たないことから、棺台とは考え難い。壇上面にみられた炭化物や灰層、刀子の出土などを考慮した用途を考えるべきであろう。また、ゲンギョウの山1号墳が終末期古墳に属する可能性が高いことから、壇構造が形骸化された形態になったものとするれば、6世紀後半の築造とされる定形化された高浪古墳から、ゲンギョウの山1号墳へと続く系統にのる石室墳が今後何基か発見されてくることも予想される。地域的には今のところ丹後地域にみられるだけである。両古墳の位置や時期を考慮すれば、この雛壇付石室は、丹後地域を中心として展開されているものと推測される。

尾根上に並ぶ木棺直葬墳の一群は、出土した土師器から5世紀前半を中心とし、若干遡る時期の築造と考えられる。ただし、現在整理途中であり、詳細については後の報告に譲ることとしたい。

(三好博喜=当センター調査課調査員)

- 注1 増田孝彦『宮の森古墳群(京埋セ現地説明会資料No.86-05)』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986
- 注2 樋口隆康「冑形埴輪の新出土例」(『考古学雑誌』42-1, 日本考古学会) 1956
- 注3 久保哲正・波多野徹『高浪古墳発掘調査概報(京都府野田川町文化財調査報告第1集)』野田川町教育委員会 1985
- 注4 近藤義行・中川淳美ほか『向野西古墳群発掘調査概要報告書』福知山市教育委員会 1974

舞鶴市 志高遺跡第7次の発掘調査 (A・B地区)

肥 後 弘 幸

1. はじめに

志高遺跡は、京都府北部を流れる由良川の下流域の自然堤防上に立地する。調査は、建設省の実施する由良川の改修工事に先立って、昭和55年度から行っている。過去6年間の調査で、志高遺跡は縄文時代前期から明治時代に至る遺構・遺物を多量に包蔵する府下最大級の複合集落遺跡であることがわかっている。

今年度の調査は第7次調査にあたり、調査地区は上流側からA・B・Cの3地区に分かれている。ここでは、すでにその調査をほぼ終了している小字舟戸に位置するA・B地区の調査について、建物跡を中心に紹介する。

2. A地区の調査(調査面積約900m²)

この地区は、第4次調査地区と第6次調査地区との間に位置する。



第1図 調査地位置図 (1/25,000)

(1) 縄文時代 地表下6.5m(海拔0m)から4.3m(海拔4.3m)のところで遺構および包含層を検出した。検出した包含層は早期末から前期末に及ぶもので13面あり、そのうち遺構面は、3面からなる。厚さ2.1mにおよぶ包含層は、粘質土と砂質土の互層からなる。検出遺構は、住居跡・炉跡及び土坑である。遺物は、土器・石器・石製品及び骨片等であり、その総数は、コンテナにして約80箱ある。詳しくは、次回に紹介する。

(2) 弥生時代中期(第2図)

今回の調査地は第Ⅳ様式の集落のほぼ中心地域にあたる。地表下約2.3m(海拔約4.2m)のところで検出した。検出した住居跡は5基であるが、そのうち4基はその一部を調査しただけである。

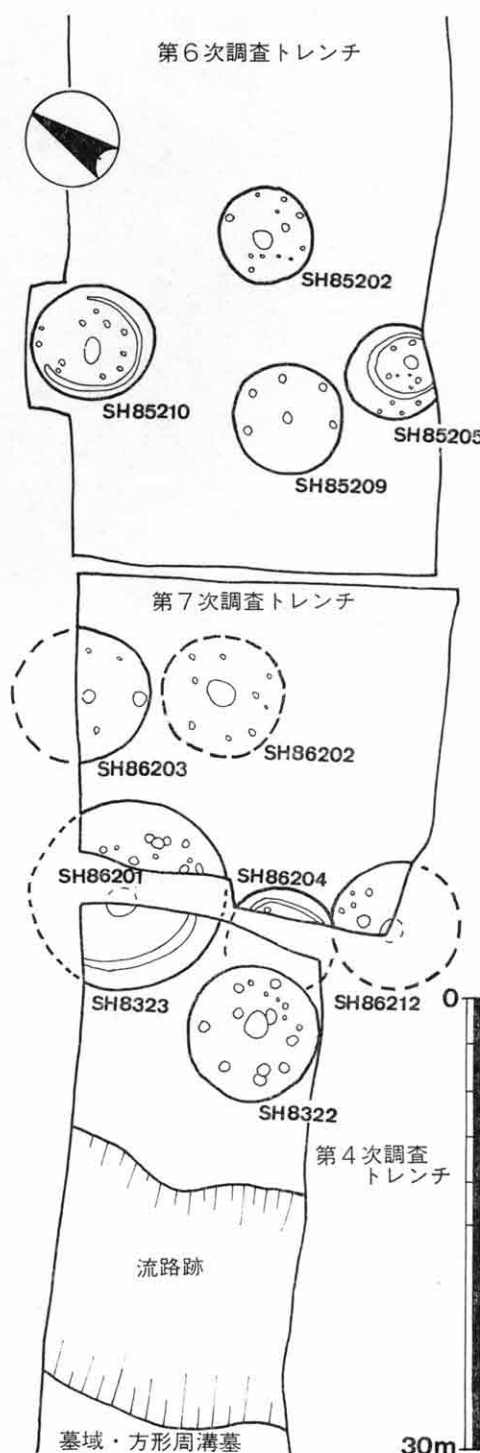
SH86201は第4次調査で検出されたSH8323と同一のもので、直径約13mを測る志高遺跡最大のものである。

SH86202は、炭・灰の堆積する中央土坑を持ち、中央土坑を中心に柱穴を配するものであるが、壁は流失していた。

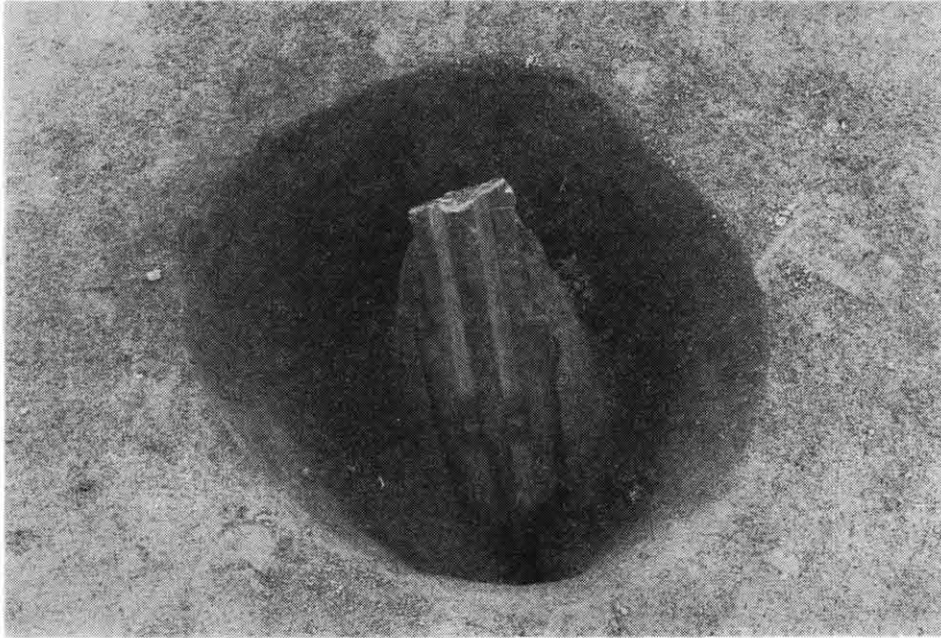
SH86203は、その約半分が、調査地外へと広がる。中央土坑と考えられるものは検出できなかった。

SH86204は、その一部を検出したにとどまる。SH85205・SH85210と同様に、溝状遺構を持つ。第4次調査で検出されていないので、住居跡でない可能性もある。

SH86212は、約4分の1を検出した。中央土坑をもつ。床下のピットから銅剣形の磨製石剣が出土した。



第2図 弥生時代中期竪穴式住居跡位置図



第3図 SH86212内銅剣形石剣出土状況

SH86201を除く各住居跡は、推定直径8m前後を測る。各住居跡からは、第Ⅳ様式の土器・石器及び管玉等が出土した。

特筆すべきこととして、SH86212での銅剣形磨製石剣の出土状況がある(第3図)。直径約15cmの床下のピット内にたてかけられた状態で出土した。しかも、このピットの上の床面には石器の製作台の可能性がある石皿状のものが置かれていた。出土した磨製石剣は、頁岩製のもので、中細形銅剣を真似た精巧なものである。中央部で、折れており、現存長17.1cm・最大幅5.4cm・最大厚1.3cmを測る。中央部で意識的に折り、住居跡の床下に埋納していた可能性がある。SH86212が大型のSH86201に隣接していることも何らかの意味があるのかもしれない。

今回の調査・第4次調査・第6次調査で中期の住居跡が50mの範囲の中で、10基検出された。いずれも中期後葉に属するものである。第4次調査で報告されているSH8322とSH8323の遺物を比べてみると、若干の時間差が見られる。今後の整理結果を待たざるを得ないが、10基の住居は同時に存在したものではないだろう。

これまでの調査で、この集落の中心近くを20~30mの幅で、断ち割った。その結果は以下の通りである。①中期後葉に営まれた集落である。②集落の南西には、大溝を隔てて、方形周溝墓からなる墓域がある。集落の北東には、河道もしくは、氾濫原が存在する。③

直径8m前後の円形竪穴式住居からなる集落であるが、1基だけ径13mの大型のものを含む。④玉作りを行う。⑤銅剣形磨製石剣を祭祀行為に用いた可能性がある。

(3) 古墳時代後期から奈良時代初頭(第4図)

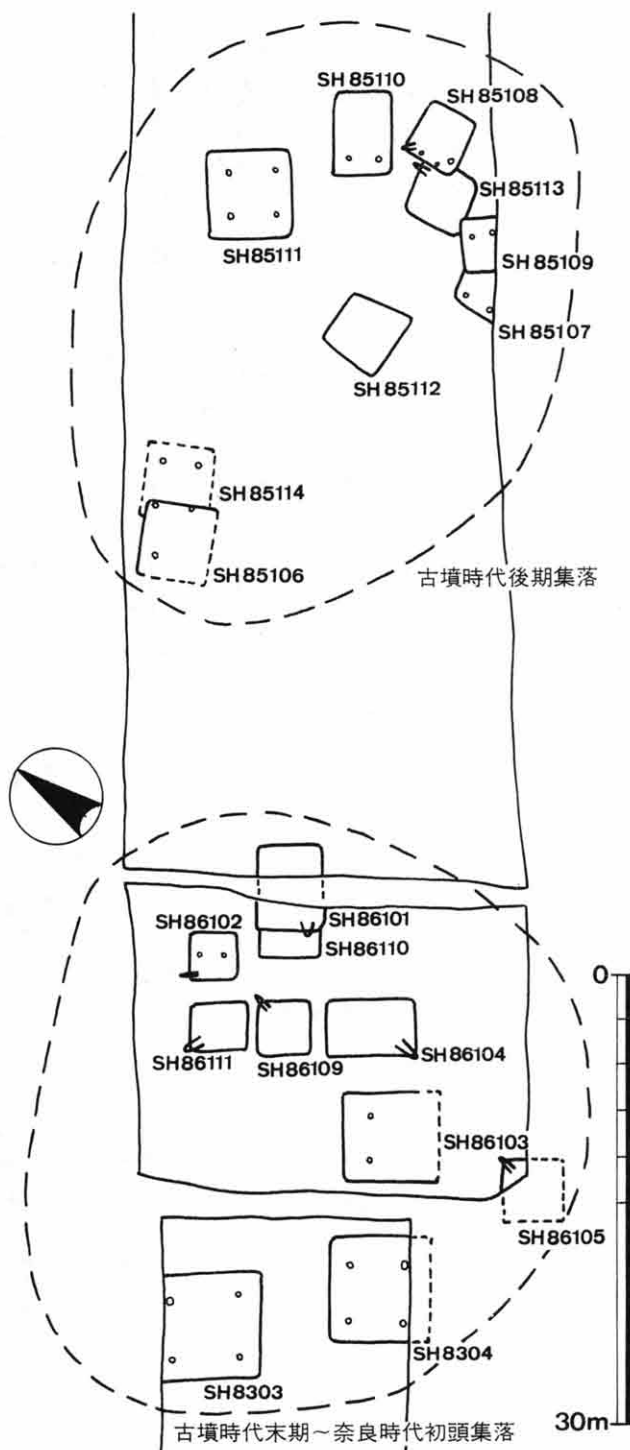
この地域で方形の竪穴式住居が営まれた時期で、今回の調査地内においても7世紀後半～8世紀初頭の集落跡を検出した。第4次調査で検出されている2基を含めて、10基の住居跡からなる。遺物整理が及んでいないので、現段階では、時期等を明確にできないが、同時に存在したものではない。

10基の住居跡は、その構造から、2つのグループに分かれる。

ひとつは、竈を持たず、一辺6m以上を測る大型のものである。SH8403・SH8404・SH86103が相当する。

もうひとつは、コーナー部に竈を作り付けたものである。長方形のプランを持つものもあり、一辺は3mから4m前後のものが多い。

2つの住居跡形態が見ら



第4図 古墳時代後期～奈良時代竪穴式住居位置図

れるものの、10基の住居跡は、主軸方向を揃えており、建物配置の計画性が窺える。この計画性は、これに続く掘立柱建物に受け継がれている。

この集落の北東に、先行すると思われる集落跡を検出しているが、配置・方向性等かなり無秩序である。

(4) 奈良時代(第5図)

今回の調査地、第6次調査で検出した掘立柱建物群跡の西端にあたる。

新たに6棟の掘立柱建物跡を検出し、あわせて16棟の建物を検出したことになる。これらの建物は、すべて同一面で検出したのではなく、包含層の上層と下層で検出した。右図では、下層で検出したものを黒塗りで、表現した。ただし、現段階では、上層の一群と下層の一群が、それぞれ、別の建物群を構成しているとは言い切れない。

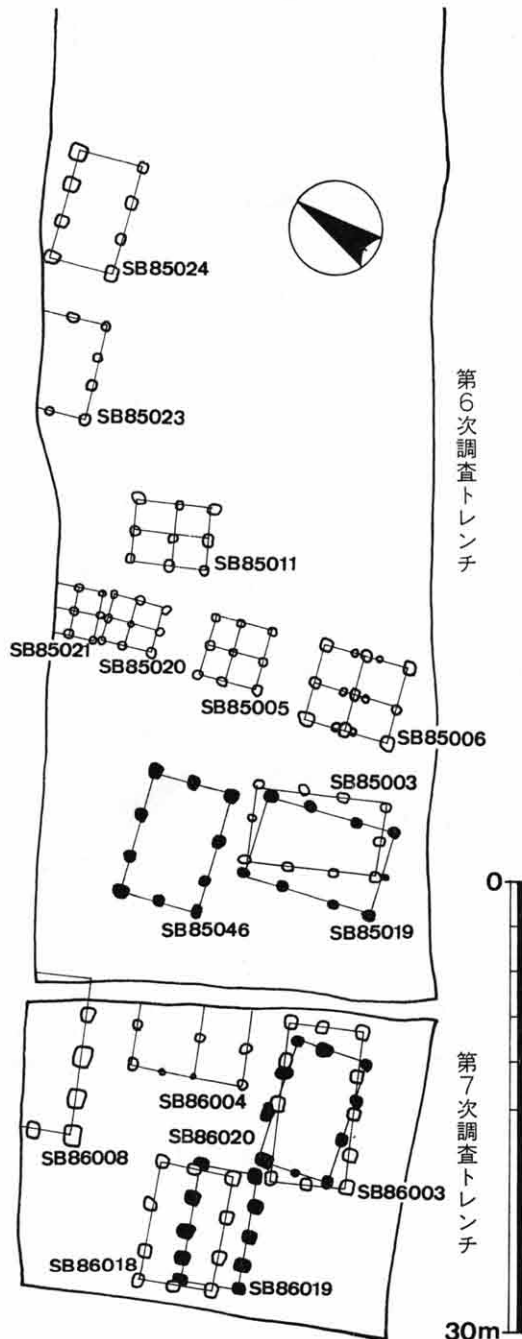
今回検出した建物は次のとおりである。

SB86020は、2間×3間の建物である。SB86003と同じ場所にあり、先行する建物である。

SB86019は、SB86018に切られる1間×4間の建物である。東側の柱列は一部上層でも検出できた。

SB86018は、SB86019と同一面で検出した2間×3間の建物跡で、SB86019の柱穴を壊して建てられている。

SB86008は、2間×4間以上の大型の建物跡である。調査地内では、その南側を検出しただけである。柱穴の掘形は、一辺80~100cmを測る方形の大きなものである。東西方向の柱



第5図 奈良時代掘立柱建物跡位置図

間には円形のピットが並んでおり(SA17)、柱を据えつけた時に用いられた遺構と思われる。

今回検出されたものを含めて、この地区で、計16棟の掘立柱建物跡が検出できた。これらの建物群は、大きく2群からなると考えられる。北側のSB85023・SB85024は、さらに北側に広がる建物群と考えられる。その他のものとしては、西側に2間×3間以上の建物を配し、東側には2間×2間の倉庫群を配する構造をとる。この建物群は、第4次調査で検出されていないことから、さらに西に広がるものではない。建物の配置・棟向き・重複関係から幾度かの建直しが考えられる。SB85046・SB85019・SB86020・SB85006・SB85005・SB85020がある時期の建物配置を構成し、SB85003・SB86003・SB85011が別の時期の建物配置を構成すると予想できるが、今後の遺物整理の成果を待って再検討を要する。

3. B地区の調査(巻頭コロタイプ写真・調査面積約850m²)

この地区は、第5次調査A地区に隣接する北西側である。

弥生時代の石組遺構・墓域、古墳時代の住居跡、奈良時代の竪穴式住居跡、鎌倉時代の墓群を検出した。ここでは、弥生時代の墓状遺構について簡単に紹介し、詳しくは次号に報告する。

検出した遺構は、2段の貼り石を持つ1号墓と5～7段の貼り石を持つ2号墓である。

1号墓は、一辺6m以上を測り、盛土を持つ。墳丘上に土器を供献する土壇が3基あり、そのうちの1つは棺を埋納していた可能性がある。供献されていた土器は、壺・甕・高杯である。底部を穿孔しているものがある。第Ⅳ様式に属する。

2号墓では、一辺と2隅を検出した。検出した一辺は15.5mを測り、墳丘の高さは0.8mを測る。検出した範囲内では、盛土と考えられるものはなく、地山を掘り抜いたものと考えられる。この遺構に伴う遺物は少なく、貼り石の間から出土した3片だけであり、いずれも中期に属するものである。

1号墓と2号墓の間には、幅約3mの溝があり、この溝は2号墓の周囲を巡っているようである。溝内からは、遺物はほとんど出土しなかった。このことから、2号墓は方形周溝墓の墳丘斜面に貼り石を持つものとも考えられる。

2号墓は、堤防の下に保存されることになった。

4. おわりに

今回は、志高遺跡の中心付近にあたるA地区と、旧河道もしくは氾濫原を挟んで対岸にあたるB地区の調査を行った。ここでは、問題点を中心に述べてみたい。

A地区では、縄文時代前期・弥生時代中期・古墳時代後期から奈良時代にかけての集落

遺構を検出した。

縄文時代前期の包含層は厚く、幾層にも分かれており、縄文時代早期末から前期にかけて編年作業を行うのに、良好な資料となることであろう。

弥生時代中期後葉の集落構造を解明する資料を得ることができた。今後、遺物を検討し、集落がどのように変わっていくかを検討しなければならない。そのなかで、大型住居(SH 86201)の持つ意味も考えていく必要がある。

古墳時代後期から奈良時代にかけて、竪穴式住居から掘立柱建物へと移行していく様相を知ることができた。この集落は、平安時代の初頭に廃絶するものと考えられるが、100年以上にもわたる集落の存続およびその整然とした配置を今後検討していく必要があろう。

B地区では、弥生時代中期の遺構・古墳時代の住居跡・奈良時代の住居跡・中世墓等を検出した。なかでも弥生時代中期後葉の墳墓は、特に注目すべきものである。墳墓の斜面に貼り石を持つものとしては、山陰から北陸・広島にかけて分布する四隅突出墓があるが、これの初現形態と言われるものとよく似ており、時期的にもほぼ一致する。ただ、低地と丘陵という立地条件において大きく異なる。また、今日まで丹後・但馬地域は四隅突出墓の空白地域である。^(注1)

志高遺跡は、現在C地区の調査を開始したところである。庄内並行期と古墳時代中期の集落跡の検出が予想される。志高遺跡の空白期を埋めるものである。

(肥後弘幸＝当センター調査課調査員)

注1 京都府熊野郡久美浜町権現山古墳を四隅突出墓と考えることもできるが、時期等の問題点があり、現段階では、否定的に考えたい。京都府中郡弥栄町奈具岡遺跡の貼り石を持つ遺構を、今回検出した志高遺跡のものに近いものと考えたい。

久保哲正・大槻真純・岡田晃治・細川修平・細川康晴 『権現山古墳発掘調査概報』(京都府久美浜町文化財調査報告第9集) 久美浜町教育委員会 1984.3

奥村清一郎・林日佐子 『奈具岡遺跡第3次発掘調査報告書』(京都府弥栄町文化財調査報告書第4集) 弥栄町教育委員会 1986.3

志高遺跡に関する資料

1. 杉本嘉美『志高遺跡調査概報』舞鶴市教育委員会 1981
2. 吉岡博之『志高遺跡—昭和56年度花ノ木・スドロ藪下地区および久田美地区の調査概要—』(舞鶴市文化財調査報告 第6集 舞鶴市教育委員会) 1982
3. 吉岡博之ほか『志高遺跡—昭和57年度カキ安地区の調査概要—』(舞鶴市文化財報告 第4集 舞鶴市教育委員会) 1983
4. 吉岡博之『志高遺跡—昭和58年度カキ安・舟戸地区の調査概要—』(舞鶴市文化財調査報告 第7集 舞鶴市教育委員会) 1984

5. 岩松 保「昭和59年度発掘調査略報 24. 志高遺跡」『京都府埋蔵文化財情報』第16号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985. 6
6. 岩松 保「志高遺跡昭和59年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第17冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985
7. 吉岡博之『志高遺跡Ⅱ—弥生土器の概要—』舞鶴市教育委員会 1986. 1
8. 山下 正・肥後弘幸「昭和60年度志高遺跡の発掘調査」『京都府埋蔵文化財情報』第19号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986. 3
9. 肥後弘幸「志高遺跡第6次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第21冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986
10. 志高遺跡第7次調査 現地説明会資料 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986

昭和61年度発掘調査略報

6. 田 辺 城 跡 第 9 次

所在地 舞鶴市北田辺小字追手前127番地

調査期間 昭和61年10月23日～同年10月30日

調査面積 34m²

はじめに 田辺城は、天正12(1584)年頃、細川氏によって築かれ、明治4(1871)年に廃城になったもので、舞鶴城とも呼ばれた。今回の調査は、国道27号線の西舞鶴地区舗装修繕工事に先立って実施したものであり、調査地は、江戸時代の絵図及び近年の発掘調査の成果による城郭の復原では、大手門、あるいは町屋からそれに通ずる土橋の位置にあたと想定されていた。

調査の概要 調査地に1.5×20mの南北に長いトレンチを設定し、重機によって掘削を開始した。地表下約1mまでは、アスファルトの下、バラス・黄褐色土置土・暗灰褐色砂混り粘土が続くが、その下層には暗緑灰褐色砂混り土が厚さ10cm程度で、トレンチ全面に認められ、整地層と判断された。その下は暗灰色の粘土が厚く(30cm前後)堆積しており、多量の木質遺物とともに、中・近世陶磁器等が若干出土した。地表下1.8m以下は、灰色の湿った粘土で、地山と推察される。

出土遺物は、上述の整地層より下位に限って見られたが、築城以前の瀬戸系灰釉皿片を除くと、いずれも17世紀から18世紀初頭の天目碗・伊万里系染付碗・土師質小皿等である。他に木製品として、漆塗碗・箸・木札等が出土した。

まとめ 当初、大手門に至る土橋の検出が期待された今回の調査であったが、整地層の様相や従来の調査結果から見て、大手門はもとより、土橋も、今回の調査地より東にあったらしいと推測され、今回は濠の町屋側の整地層を検出したと判断される。田辺城は築城当初には、南側に大手門があったが、江戸時代の「田辺御城図」では、今回の調査地付近(小字追手前)に移っている。今後、当城の城郭の改廃・修復の時期や規模を確定する作業上、狭小ではあったが、今回の調査トレンチの様相と出土遺物は、貴重な資料となろう。

(小山 雅人)



調査地位置図 (1/25,000)

7. 綾 中 遺 跡

所在地 綾部市西町
 調査期間 昭和61年5月27日～同年9月12日
 調査面積 約800m²

はじめに 綾中遺跡の発掘調査は、府営住宅建築に先立ち、京都府土木建築部の依頼を受けて、昭和60・61年度の2年度にわたり実施したものである。昨年度の試掘調査で、7・8トレンチでそれぞれ中世の掘立柱建物跡が検出され、遺跡は西及び北方向へのびる可能性が考えられた。そこで、本年度は7・8トレンチの西方を、住宅の建築される範囲いっぱいまで広げて調査を行った。

調査概要 調査の結果、主な遺構として、古墳時代前期の竪穴式住居跡・溝、奈良時代の溝、中世の掘立柱建物跡群を検出した。以下、各時期毎に概略を記す。

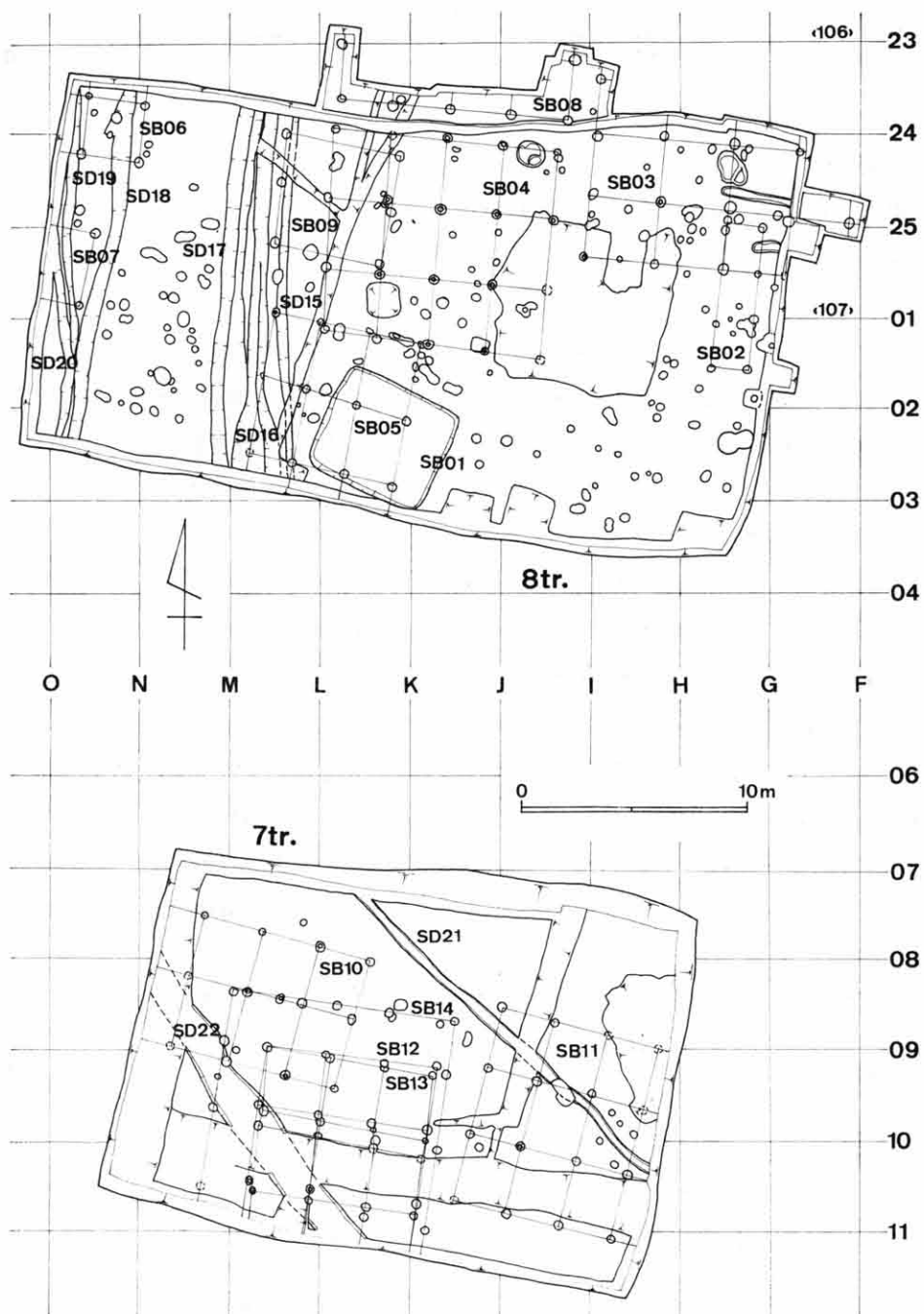
古墳時代前期 竪穴式住居跡(SB01)は、東西約5.4m・南北約4.5mで隅丸方形を呈する。壁高の残りは約20cmで、周壁溝の一部を確認できた。南辺の中央部には方形土壇が、北辺中央部では粘土が堅く貼られ周囲の床面より数cm高い部分があった。これらは、この住居内での機能を考える上で重要な資料となりえよう。溝(SD21・SD22)は、それぞれ幅約2m・深さ約30cm、幅約40cm・深さ約20cmを測る。竪穴式住居跡(SB01)を含む集落を囲む溝であったかもしれない。また、いずれかの溝は、時期不明の溝(SD19・SD20)に連続する可能性がある。

奈良時代 溝(SD18)は、幅約40cm・深さ約5cmを測る。ほぼ南北方向に走っており、当地域の条里制区画を知る一資料になりえよう。深さがわずか5cmであること、包含層に同時期の遺物が数多くみられることなどから、この時期の遺構はすでに削平されたと考えられる。

中世 8トレンチで8棟(SB02～SB09)、7トレンチで5棟(SB10～SB14)、合計で13棟の掘立柱建物跡を検出した。それぞれの建物の規模等は第1表のとおりである。これらの建物跡は、出土遺物・ピットの層位・切り合い関係・建物の方向等を検討して、大きく2時期に分けることが可能で



第1図 調査地位図(1/25,000)



第2図 遺構配置図

第1表 掘立柱建物跡規模一覧表

遺構 No.	間数 (間) 東西×南北	規模 (m) 東西×南北	柱間距離 東西(m)	柱間距離 南北(m)	方 向	時 期
SB02	1間×3間	1.7×6.7	1.7	2.2	N 7°E	I
SB03	4間以上×3間以上	×	3.0	2.6	N 6°E	II
SB04	4間×3間	10.0×8.9	2.5	3.0	N5.5°E	II
SB05	3間×2間以上	6.6×	2.2	3.2	N11°E	I
SB06	1間以上×1間以上	×	2.5	2.6	N 7°E	II
SB07	×1間	×3.3		3.3	N12.5°E	I
SB08	4間×1間以上	10.1×	2.5	2.7	N5.5°E	II
SB09	1間×2間	5.1×4.8	5.1	2.4	N11°E	I
SB10	3間以上×2.3間	7.5×	2.5	2.9	N15.5°E	II
SB11	3間以上×3間以上	7.2×8.9	2.4	3.0	N15°E	II
SB12	3間×2間以上	7.6×	2.5	3.0	N8.5°E	I
SB13	3間×3間以上	7.4×	2.5		N8.5°E	I
SB14	4間×3間以上	10.0×	2.5	3.1	N8.5°E	I

ある。ただ、いずれもおおむね12世紀頃に位置づけられる。各建物跡は、磁北よりわずかに東に振って建てられている。また、総柱の規模の大きい建物跡は、柱間が2mを超え、約30cmを基本単位として、その整数倍の位置に柱穴が配されている。

まとめ 今回の調査で得られた成果は、大きく2つに分けられる。一つは古墳時代前期の竪穴式住居跡及び溝の検出で、あと一つは中世の掘立柱建物跡群の検出である。前者は、古墳時代前期の集落跡の一角を検出したものであり、遺跡は主に北へ広がっていくと考えられる。また、調査地の北方の青野西遺跡から同時期の集落跡が見つかっており、今後両遺跡の関連に注目できよう。後者は、中世の集落のほぼ中心地を検出できたものと考えられ、その成果は大きい。このように、中世の掘立柱建物跡群が発掘調査により検出されたのは綾部市では初めてで、中丹以北に目を転じて大内城跡・城ノ尾城館跡があるにすぎない。これらはあくまで丘陵上に設けられた城館跡で、沖積地に立地する当遺跡とは若干性格が異なる。集落のもつ性格については、関連遺跡との比較・文献史料の検索も含めて、現在整理検討中である。

(西岸 秀文)

8. 上 中 遺 跡

所在地 北桑田郡京北町下弓削
調査期間 昭和61年8月11日～同年9月30日
調査面積 約160m²

はじめに この調査は、京都府立北桑田高等学校の視聴覚教室や図書室等の新築工事に先立ち行ったものである。調査地である北桑田高等学校は、南流する弓削川右岸の丘陵裾部に位置する。弓削川沿いの丘陵部には、弾正古墳群・鳥谷古墳群・ふくがなる古墳群・矢谷奥古墳群などがあり、この上中遺跡は集落遺跡の1つと考えられてきた。

調査概要 調査は、調査地内に設定した4か所の試掘掘りから始めた。その結果、調査地西側は、バラスの下が岩盤となり遺構はなかった。調査地東側では、岩盤が少しずつ下っており、その上に黒色土が堆積していた。この黒色土は、昭和58年度と60年度調査時に確認した黒褐色土に相当するものと思われた。両年度の調査では黒褐色土を切り込んで遺構が存在したことから、今回の調査地東側には何らかの遺構が存在すると思われた。

調査の結果、地山は南西から北東へ緩やかに下っており、調査地北側での土層は、表土・盛土・旧表土・黒色土・黄褐色土の地山であった。旧表土まで重機で掘削し、黒色土からは人力で徐々に掘り下げた。黒色土下層において、円形あるいは方形の掘形が見つかった。直径および一辺は20～30cmを測り、黒色土が堆積していたが、出土遺物がなく時期性格については不明である。また、幅約1m・長さ約3.5m・深さ約40cmの溝状の遺構も検出したが、出土遺物はなく時期性格については不明である。

まとめ 今回の調査地の大半において、北桑田高校を建設する際にかなり削平されており、調査地北東部から円形あるいは方形の掘形や溝状の遺構を検出したのみであった。これらの遺構は、旧表土からそれほど深くない所で検出したことや、出土遺物がないこと、また調査前は果樹園であったため、検出面にまで攪乱が及んでいたことから、集落跡の一部であるかは不明である。

(岡崎 研一)



調査地位置図 (1/50,000)

9. 蒲 生 遺 跡

所在地 船井郡丹波町字豊田
 調査期間 昭和61年8月25日～同年10月9日
 調査面積 約400m²

はじめに 蒲生遺跡の発掘調査は、府立学校(須知高校)建築工事に先立ち、京都府教育委員会の依頼を受けて行ったものである。昭和58年度には、同じ須知高校の農業科実習棟の建設に伴って調査が実施され、弥生時代中期の竪穴式住居跡・土壇等が検出されている。今回の調査地は、その南西方向で、北方より緩やかにのびる尾根の先端部にあたる。また、蒲生遺跡と推定される区域の最東端に位置する。

調査概要 8月25日に3m四方のグリッドを調査地の東端と西端とに設けて、掘削を開始した。その結果を考慮して、遺構の遺存状態が良好と考えられる部分から、順次4か所のトレンチを開けて調査を行った。1～3トレンチでは、いずれも校舎建築時の削平が著しく、わずかに10cm程度の深さで土壇・ピットが検出できるのみであった。また、出土遺物も皆無で、時期決定も不可能であった。わずかに、最後に開けた4トレンチで、円形土壇及び溝を検出し、そこから少量ながら遺物が出土した。

まとめ 今回の発掘調査によって得られた知見を列記すると以下のとおりである。

1. 調査地は、前校舎の建築時にかなりの削平を受けていたことが確認できた。ただ、各トレンチの状況から、旧地形は東から西に緩やかに傾斜していたと考えられる。
2. 検出した土壇・溝は、出土遺物から6世紀前半頃のものと考えられる。遺構個々の性格は不明であるが、調査地以東のあたりにその時期の集落跡が存在していると推察できる。
3. 遺構には伴わないが6世紀後半の須恵器片も出土しており、その時期の遺構の存在も推定できる。

以上が主な成果であり、この地域で、発掘調査が行われることはまれで、資料の蓄積も少ない。その意味からも貴重な成果が得られたと言えるよう。

(西岸 秀文)



調査地位置図 (1/25,000)

10. 長岡京跡左京第151次 (7ANEKZ-6)

所在地 向日市鶏冠井町清水他
調査期間 昭和61年4月30日～同年8月20日
調査面積 約1,000m²

はじめに 今回の調査は、日本道路公団大阪管理局が計画している名神高速道路羽束師川橋架替(下部I)工事に伴う事前調査として実施したものである。

長岡京の条坊復元案によれば、当調査地は左京三条三坊一町・同二町・同八町および二条三坊五町にわたっており、二条大路・三条第一小路・東三坊第一小路等の通過地点に当たる。このほか、周辺部ではこれまで弥生時代中期頃に属する遺構・遺物等の広がりが確認されており鶏冠井清水遺跡として知られている。

調査概要 名神高速道路上り車線側(Aトレンチ)、下り車線側(B・Cトレンチ)の3地区に分けて調査を行った。各トレンチは道路法面の高位側に鋼矢板を打ち込み掘削壁面を保護したのち、重機により道路造成時の盛り土および旧耕作土・床土を除去した。今回の主要な遺構は、旧耕作土下約40cmの黒褐色ないし暗青灰色粘土層面で確認された。以下各トレンチの調査結果について概略を記す。

Aトレンチ(長さ54m, 最大幅5.5m)

検出遺構は層位上3時期に分けられ、それぞれ弥生～古墳時代・長岡京期・中世に属する。弥生～古墳時代の遺構としては、水田畦畔跡・足跡・溝等がある。これらの上面には薄く砂層が覆う。長岡京期の主要な遺構としては、トレンチ南端で検出した想定二条大路の北側溝(幅1.1m)および柵状の柱穴列がある。中世に属するものとしては東西方向の耕作溝群・柱穴・杭列等がある。なお、検出遺構全般を通して、それらの所属時期の手掛かりとなるような遺物の伴出は少ない。



第1図 調査地位置図 (1/25,000)

Bトレンチ(長さ72m, 最大幅5.5m)

Aトレンチの反対車線側に設置したトレンチである。当調査地においてはAトレンチで確認された二条大路北側溝の延長と新たに同南側溝を検出した。この他長岡京期の掘立柱建物跡や土坑・足跡・水田跡・溝および羽東師川旧流路等を検出した。このうちトレンチの南端部で検出した掘立柱建物跡は方向・規模等不明であるが、掘形の一边が約1mを測る比較的大型の建物跡で北西隅柱の柱抜き取り穴から「越前国大野郡(郷名不詳)」の地名記載がある木簡が一点出土した。

Cトレンチ(長さ58m, 最大幅5.5m)

Bトレンチの南側に設置したトレンチである。当トレンチからは長岡京期の遺構として三条第一小路および東三坊第一小路の条坊側溝を確認した。このほかの遺構としては、他の調査地と同様な弥生～古墳時代に属する水田跡・足跡群・土坑・ピット群・溝等がある。東三坊第一小路については東側溝が調査地外に当たるため、今回は西側溝のみの確認にとどまった。また、三条第一小路は南北両側溝を検出することができたが、南側溝については削平の度合いが大きく痕跡のみを残すだけであった。

まとめ 今回の調査では各調査区で弥生・古墳時代から中世にわたる時期の各種の遺構・遺物が検出され、名神高速道路建設時の地下構築物が深く及んでいない部分については遺構等が良好に残されていることが明らかになった。今回調査の主な目的とした長岡京条坊の確認に関しては、すでに述べたように二条大路ほか3条を検出した。二条大路については、南北両側溝心々間の距離が約9.2mを測ることが明らかになった。この数値は従来平城京跡等で復元されている大路路面幅17丈(51m)に比べて極端に狭く、延喜式に述べられている通常の大路幅8丈(24m)よりも狭いことがわかる。今回検出した二条大路の規模は条間の小路クラスに等しく、宮域の南限を画する重要な大路に比定するには躊躇せざるをえない。これについては従来三条坊間小路とされる路を二条大路に当て、大路を二本分下げて考える案も出されている。いずれにせよ今回の調査が今後長岡京研究に果たす役割は大きいものと思われる。

(村尾 政人・辻本 和美)



第2図 Bトレンチ調査状況(北から)

11. 長岡京跡右京第240次 (ANGAR-4地区)

所在地 長岡京市井ノ内朝日寺11(府立向日ヶ丘養護学校敷地内)
調査期間 昭和61年9月11日～同年11月17日
調査面積 約550m²

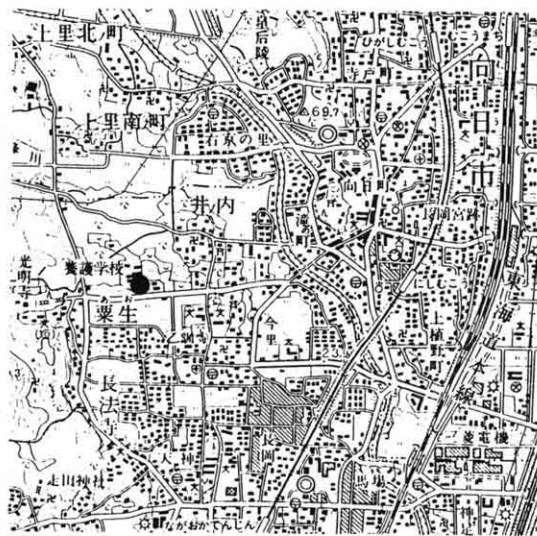
はじめに この調査は、府立向日ヶ丘養護学校管理棟新築工事に伴う発掘調査である。調査対象地は、長岡京の条坊復元によれば右京二条四坊六町にあたり、二条第二小路が調査地の南端を通る。また、縄文時代から近世に至る井ノ内遺跡の範囲にも含まれる。調査地は西から東に緩やかに傾斜する段丘上に位置し、南側を坂川が東へと流れている。当地に養護学校が建てられたとき、西側の高い部分を削って東側に盛土をしているため、現在の標高は44.7m前後となっている。

養護学校内では、これまでに2回の調査が実施され、奈良時代から近世の遺構、古墳時代から江戸時代の遺物が発見されている。こうしたことから、今回の調査でも、長岡京跡や井ノ内遺跡に関連する遺構・遺物の検出が予想された。

調査概要 今回の調査地は、西方から東方に延びる段丘上にあり、かつて当地に水田が作られたときに削平されていることが判明した。ほとんどの遺構は、このとき削られたものと考えられる。南端では、一段低くなった場所で湿地または沼状の地形が検出された。最も低い部分には粘土層を削り込んだ砂層があり、坂川の旧流路の一部と考えられる。その後、この湿地が埋められて水田になったことがわかった。水田に伴う杭列が検出された。

東北部では、柱掘形が検出されたが、その数が少なく建物跡かどうか不明である。この東南から土器がまとまって出土した。

西北端からは、平面が方形の掘形を持ち、3段に掘られた井戸(SE24001)が検出された。井戸の



第1図 調査地位置図 (1/50,000)

1段目の掘形は、南北が約5.8mの規模で、東西の長さもほぼ同様と考えられる。2段目は南北約2.8m・東西約3mを測る。3段目は上面が2m前後の方形、下面が1.6m前後の方形となる。3段目には、縦板組隅柱横棧どめの井戸枠が半壊状態で残っており、上部の隅柱や縦板が内側に落ち込んでいた。最も残りの良い北側で、5段の横棧を確認することができた。

井戸を検出した地点の西側の壁が崩れ、鋼材による補強を行ったが、再び崩れる危険がおきたため井戸の底まで掘りきれなかった。ボーリング棒で突くと部分的に石に当たるが、礫層の石と区別が困難であり、敷石等の確認はできなかった。石に当たる部分から、一段目掘形までの深さは約6.7mを測る。井戸が掘り込まれた段丘の砂礫層からの深さは7.3～7.4mを測る。

井戸内からは、古墳時代から長岡京期の遺物が出土しており、長岡京以後のものとはみられず、この井戸は長岡京期に造られたものと考えられる。また、上層の井戸枠を引き抜いた後、一度に埋められたことが、埋土の状況からうかがわれる。

出土遺物には、須恵器、土師器、瓦器、陶器、瓦などがある。井戸からは、長岡京期の須恵器、土師器、緑釉陶器、土馬、ミニチュアカマド、鉄器(鋤先)、木材片など、古墳時代の須恵器杯身・杯蓋・甕などが出土している。

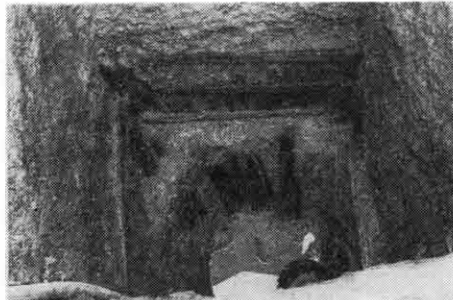
まとめ 今回の調査で検出された遺構としては、後世の削平を受けながらも掘形上面で一辺約6mの大きさを持つ井戸があげられる。この井戸は、これまで長岡京跡の調査で確認された井戸の中で最大のものである。その性格については、ただ単に段丘上にあるために良水を得る必要から地下深く掘り下げ、その結果として規模が大きくなったという構造上の問題だけでなく、当地の地理的環境や長岡宮の真西に位置するという条件から判断して、相当な有力者や貴族の邸宅に付属したのと考えられる。

これについては、周辺部で建物跡などが検出されていないため判断はできないが、長岡京の大規模な造営が西山山麓の近くまでおよんでいたことを示す重要な資料である。今後、周辺部での調査に期待される。

(石尾 政信)



井戸SE24001 (東から)



井戸SE24001・井戸枠検出状況 (西から)

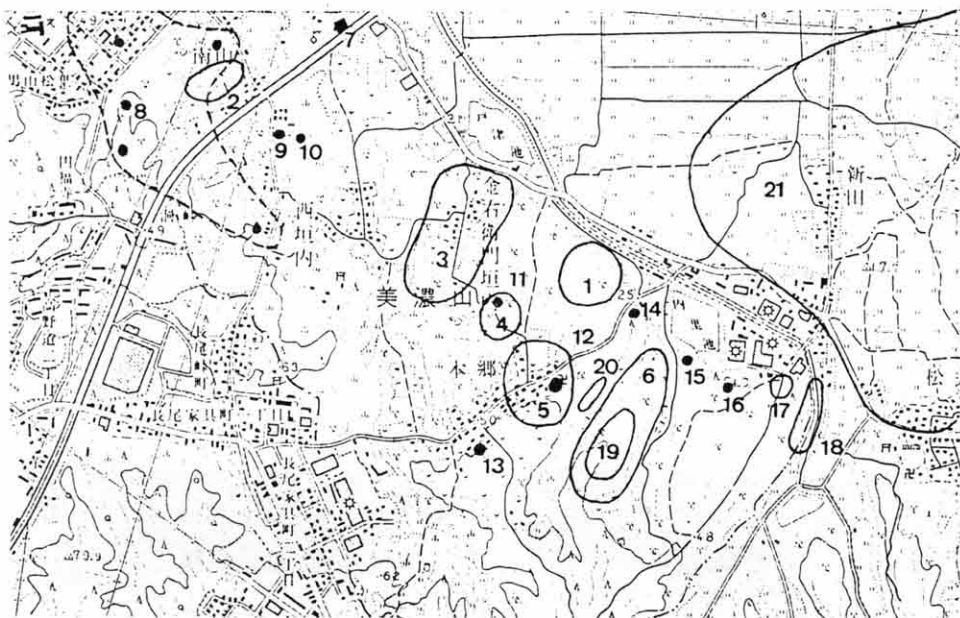
資料紹介

狐谷7号横穴墓から出土した「車輪文叩き目」
のある須恵器について

田代 弘

1. はじめに

ここに報告する資料は、1983年度に当調査研究センターが実施した狐谷横穴墓群の発掘調査において検出したものである。^(注1) 整理作業の際、担当者によって車輪文叩き目があることが注意され、概要報告書でも既に報告されている。^(注2) この種の遺物は、現状では類例に乏しく、^(注3) また、須恵器の流通状況の一端を理解する上でも貴重な参考資料であると思われる。小稿では、改めてこれを取り上げ、紹介するとともに、あわせて気づいた事柄について記すことにしたい。



第1図 狐谷横穴群位置図 (1/25,000)

- | | | | |
|---------------|--------------|-------------|------------|
| 1. 狐谷横穴群・狐谷遺跡 | 2. 南山遺跡 | 3. 金右衛門垣内遺跡 | 4. 井の元南遺跡 |
| 5. 本郷遺跡 | 6. 美濃山廃寺下層遺跡 | 7. ヒル塚古墳 | 8. 南山古墳群 |
| 9. 西二子塚古墳 | 10. 東二子塚古墳 | 11. 野上遺跡 | 12. 王塚古墳 |
| 13. 小塚古墳 | 14. 円墳 | 15. 内里池南古墳 | 16. 荒坂古墳 |
| 17. 女谷横穴群 | 18. 荒坂横穴群 | 19. 美濃山廃寺 | 20. 美濃山横穴群 |
| 21. 新田遺跡 | | | |

2. 遺跡と遺物の出土状況

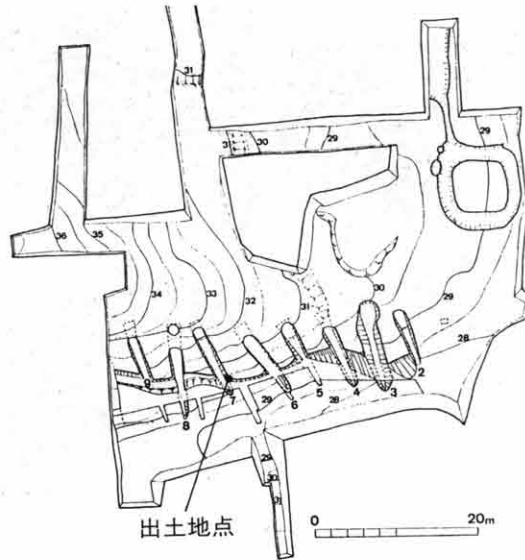
狐谷横穴墓群は、京都府八幡市美濃山字狐谷にある(第1図)。京都府八幡南高等学校の新設工事に伴う調査で新しく確認された遺跡の一つである。^(注4)

この横穴墓群は、9基以上からなることが明らかにされ、そのうち8基(2~9号横穴墓)について調査が行われた。横穴墓群は、いずれも遺構・遺物の残りがよく、築造順序や群構成を知る上で豊富な情報を提供している。

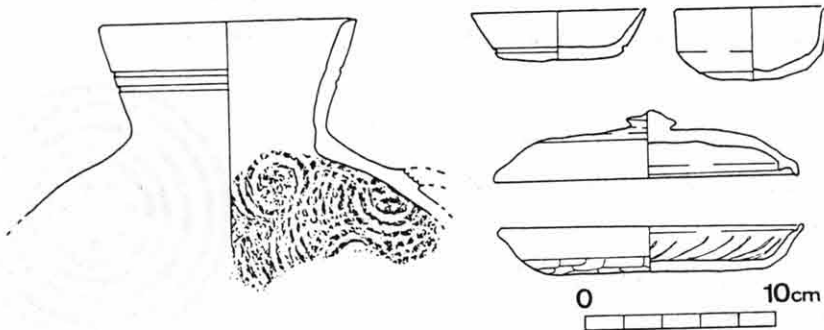
横穴墓群は、尾根の南面する斜面に一定の間隔をおいて築造され、一群をなしている。この一群は、4から7号横穴墓と2から3号横穴墓の2つの単位支群からなる東群と、8・9号横穴墓を含んで更に西に広がる西群とにわけて考えることができる。東群は西から東へ、西群は東から西へと築造される傾向にあり、このように見ると7号横穴墓は西群の築造起点となっていることがわかる。^(注5)

7号横穴墓は、全長約10mの規模を持ち、そのうち、およそ6.4mが墓道である。玄室の規模は、長さ約3.4m・幅約1.7mで、奥壁は約1.5mを測る。遺構は、玄門・玄室の天井に崩落が認められるものの、旧状をよくとどめていた。

遺物は、奥壁寄りと玄門付近の二か所に集中しており、主に玄室内から出土している。墓道にも見られたが、断片的であり散発的であった。これらの遺物から、7号横穴墓は6



第2図 遺構配置図 (図面上が北)



第3図 7号横穴墓埋土出土土器 (注文献1より転載)



第4図 車輪文叩き目(拓影・部分)(1/2)

され、その際に破砕された可能性が高い。

3. 遺物について

この遺物は、やや外方に開きながら直立する口縁部を持ち、口縁部外面には、2条の凹線がめぐる(第3図)。肩部は一部だけが残っており、把手のあった痕跡がある。把手は、上から下へ向かう環状のものであろう。体部は残りが悪いためはっきりしない点があるが、肩部の幅が一方では狭く、一方では筒状に延びていく特徴があるので、横瓶に近い形態を持っていたものと思われる。

調整は、口縁部内・外面はナデ、肩部・体部外面はカキ目を施しているが、格子目タタキが良く残っている。車輪文叩き目は、体部内面に認められた(第4図)。

この叩き目は、直径約6.5cmを測り、中心部の主たる文様と、その外側を4ないし5重に巡る同心円文からなりたっている。中央の文様は、径が2.1cmの円形で、その中に一辺が約3mmの四角形があわせて7つ施されており、植物の茎の断面を思わせるような効果を生んでいる。

第5図は、土器の表面にあらわれた叩き目を反転し、叩き具(当て具)の表面の状況を概念的に示したものである。黒塗部分は凸部を示している。この図を参考にして原体に刻まれた文様の製作方法をみてみよう。

まず、同心円状に凸部と凹部を作り出す。次いで、中心部分を取り除き、最後に、残った円のうち、最も内側

世紀末葉に築造・初葬され、その後、7世紀末葉まで追葬があったことが推測されている^(注6)。

紹介する遺物は、墓道裾の埋土を掘削中に検出したものである。検出時にはすでに細片になっていて、復元の際にも部品の足りないところが多く、完形にすることができなかった。玄室等で接合資料がみつからない事から考えて、再利用の際の廃棄物ではなく、初葬の際に墓道での祭祀的行為に供



第5図 当て具器表面の形状(1/2)

にあたる凸部分を目測で7等分するように切断し、前述したような特徴を与える。このようにして得られた文様は、基本的にすべて同心円文からなる青海波文と同じであり、意匠上、その延長線にあるとみることができる。

4. おわりに

須恵器の製作において、叩き締めは欠かすことのできない重要な作業のひとつである。この作業は、叩き板と当て具を用いて器体表面を順に叩き締めていくもので、成形を兼ね、^(注7) 高温焼成の際に割れや歪みの原因となる気泡を胎土から追い出すことを目的としている。

叩き板や当て具には、文様が刻まれることが多い。これは、原体表面に凹凸を作ることによって表面積を広げ、作業効率を高めるとともに、作業中に工具が器表に吸い着いたりしないための工夫である。^(注8) 叩き板には格子目文、当て具には青海波文と呼ばれる同心文が刻まれるのが一般的で、須恵器の表面にはしばしばこれらの痕跡を残している。

稀に、特殊な叩き目の文様を見掛けることがある。これらは、須恵器の流通状況を追求する手掛かりとして有効であるため重要視されている。その代表的なものに車輪文叩き目があり、今回報告した資料もこれに属している。

車輪文叩き目は、当て具に刻まれた文様が転写したものである。通常、器体内面においてのみ認めることができる。かつては「異形打痕」のひとつとして認識されたが、近年になって横山浩一氏によってその共通する特徴が捉えられ、明確な定義づけが行われるようになった。^(注9)

車輪文叩き目は、「同心円文と放射状文とを、たがいに中心を一致させながら重ねあわせた文様」と定義付けられるように、放射状文が文様の核になるものが多い。それに対して当例では、文様がすべて同心円文上に展開し、中心部分を欠くほかは青海波文と同じ構成をとっている。これを定義のとおり車輪文と呼んでよいかどうかは問題のあるところであるが、中心の軸をもたない車輪文とみることもできるので、小稿では同様の系譜の中で理解しておきたいと思う。

当例と同じ文様をもつ例は、周辺地域では確認できない。御教示をお願いします。

小稿の作成にあたっては、当センター小池 寛、森下 衛調査員、長岡京市埋蔵文化財センター木村泰彦調査員の教示を得た。記し謝意を表する。 (田代 弘=当センター調査課調査員)

注1 久保田健士「狐谷横穴群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第8冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983

注2 注1文献44頁

注3 平安京左京八条三坊出土例(『平安京左京八条三坊 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1982), 檜原廢寺跡出土例(注7文献による), 石本遺跡出土例(当センター辻本和美調査員教示)など。平安京左京八条三坊出土例・檜原廢寺出土例は同心円文の中心に放射状文のあるタイプ, 石本遺跡例は同心円の中心に星形のあるタイプに属している。

また, 当センターで実施した長岡京跡左京第118次調査, 同右京第110次調査でも異形叩き痕のある須恵器を確認している。これらは, 同心円文に半径分の長さの直線を付加したもので, 直線が複数になると放射状文になるタイプのものである。両者の原体は同一ではないが極めて似通っている。いずれも長岡京期に属するので, 同一工人とは言わぬまでも同一の工房で作られた可能性を考える必要がある。生産と流通を考える上で参考になる。

注4 注1と同じ

注5 水野正好「古墳時代」(『図説 発掘が語る日本史』第四巻 新人物往来社) 1986

注6 注1と同じ

注7 横山浩一「須恵器の叩き目」(『史淵』117号) 1980

注8 原口正三『日本の原始美術4 須恵器』講談社 1979

注9 横山浩一「須恵器に見える車輪文叩きの起源」(『九州文化史研究所紀要第26号』) 1981

谷内遺跡出土の木製穂摘具について

藤原敏晃

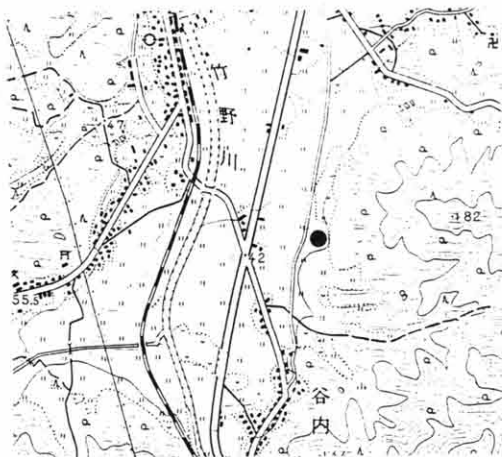
1. はじめに

谷内遺跡は、京都府北部の丹後半島中央部、中郡大宮町谷内に所在する。京都府営ほ場整備事業に伴って京都府教育委員会が1986年度立会調査を行ったところ、弥生時代～古墳時代にかけての多量の土器が出土した。そのため、1986年度に当調査研究センターへ調査の依頼があり、発掘調査を実施したものである。調査の結果、集落と直接関わる住居跡などは検出されなかったが、自然流路が3条見つかった。

遺跡は、竹野川右岸の低位段丘間に形成された小さな谷部にある。扇状地状であって、標高は、約49m前後である。遺構は、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての遺物が多量に出土した自然流路1条が主なものである。さらに時代は明確でないものの、この流路より古いものと新しいものが2条ある。

2. 木製穂摘具

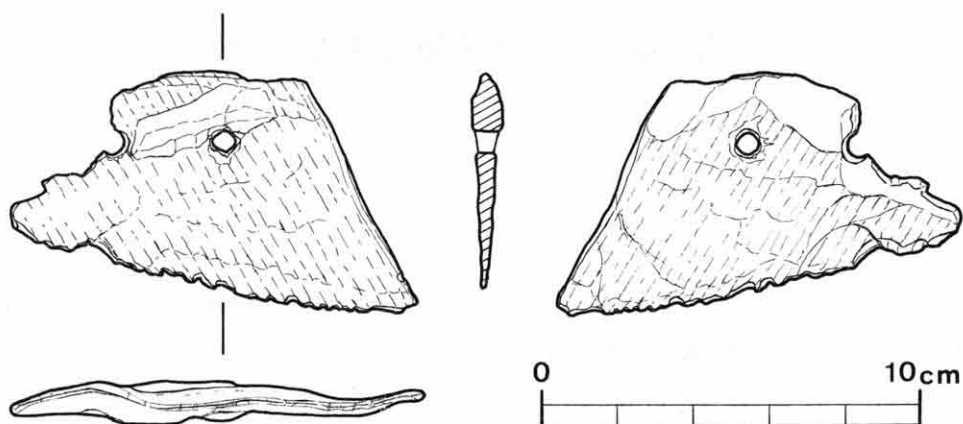
今回紹介する木製穂摘具は、遺物が多量に出土した自然流路の底近くから出土したものである。完全な形のものではなく、3分の2程度の残り具合である。残存長10.8cm・幅5.7cm・厚さ1cmを測る。木取りは、柁目板を平行四辺形に裁断したもので、刃部に対して木目が約50度の角度で走る。木製穂摘具の短辺は木目方向に合う。本体の背部よりには紐通孔2個が穿たれている。2孔間は2.8cmを測る。紐ずれ痕は顕著でない。この2孔を結ぶ状態で溝が掘られる例が多いが、本例には溝がなく、逆に断面かまぼこ状の突起がB面とした側に走る。刃部は、鋸歯状を呈しているが、これは使用の際に歯こぼれした結果と推定される。



第1図 調査地位置図 (1/25,000)

3. まとめ

今回紹介した木製穂摘具は、京都府



第2図 木製穂摘具実測図

下で初めて出土したものである。これまで、京都府を除いた近畿地方で約14遺跡ほど知られていたが^(注1)、新たに分布域を広げたことになる。近畿地方以外では、鳥取県・石川県・富山県で出土している。これらの属する時代は、弥生時代中期から古墳時代前期である。今回の例は、このうち古墳時代初めに属するものと考えられる。形状や製作方法などは他地域と大きな違いはないと思われる。

木製穂摘具は、穂摘み儀礼的な祭祀の道具とする見方もあるが^(注2)、使用痕をもつ例や数の増加から、実用の道具である可能性が強まった。この例は歯こぼれした状態であり、木製穂摘具が出土した同じ層からは、稲等の籾などを含むと思われる植物遺体が出土した。このことから、実際に使用した道具であったと推定した。さらに、石川県・富山県は石包丁の出土数の希薄なところといわれる。こうしたところでは、石包丁が消滅して手鎌が普及していく過渡期に、この変化を補う意味でも、木製穂摘具の実用的な機能・存続が必然的なものであったと考えられる。このことは丹後半島においても同様で、石包丁の出土の希薄なこの地において、石包丁を補う点でも木製穂摘具の出土は大変貴重なものである。

(藤原敏晃=当センター調査課調査員)

注1 工楽善通「木製穂摘具」(『弥生時代文化の研究』雄山閣)、本文の記述は、この本によるところが多い。

注2 『纏向』奈良県立橿原考古学研究所

注3 田代 弘氏のご教示による。

府下遺跡紹介

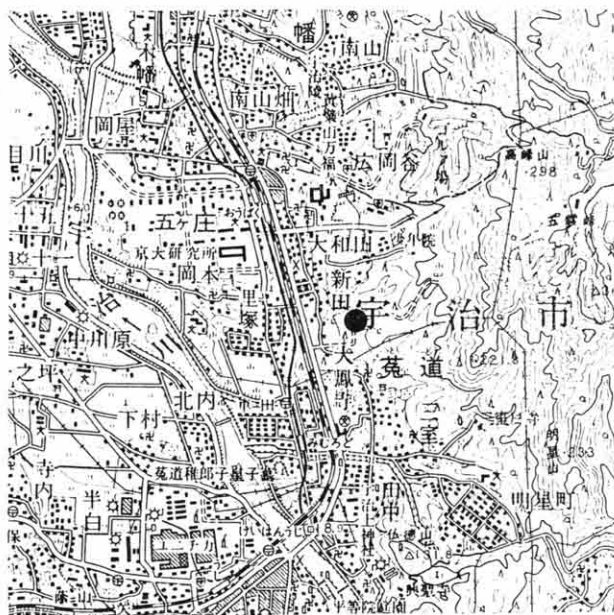
34. 宇治隼上り瓦窯跡

隼上り瓦窯跡は、宇治市兎道隼上りにあって、飛鳥の豊浦寺の瓦を焼いた窯跡であることが1982年の発掘調査で明らかとなった。豊浦寺は、^(注1)『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』によれば、「以レ是弓癸丑年宮内遷入、先金堂禮佛堂等略作、等由良宮ヲ成レ寺、故名ニ等由良寺-」とあって、推古天皇が即位した飛鳥豊浦宮が施入されて豊浦寺になったと伝えている。この伝承は、『日本書紀』にみえないことから史実とみず、『聖徳太子伝暦』の伝える^(注2)舒明6(634)年建立を採る説もある。いずれにせよ、飛鳥時代に建てられた尼寺であることはまちがいない事実である。

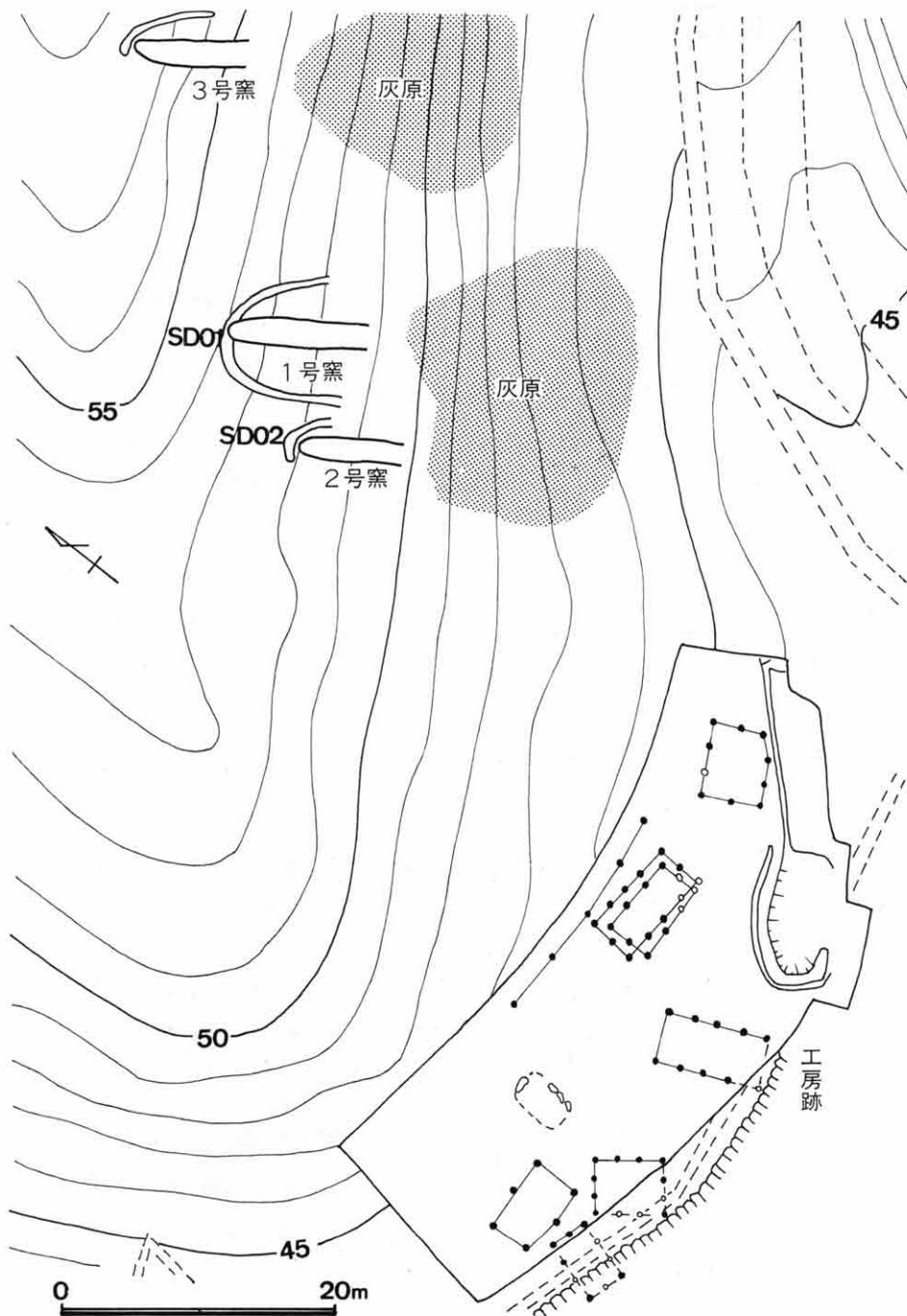
飛鳥の豊浦寺の発掘調査では、高句麗様式の軒丸瓦が出土しており、この時代を代表する瓦の様式の一つとなっている。この隼上り瓦窯跡では、豊浦寺の創建瓦と呼ばれる形式の軒丸瓦が出土している。これまで豊浦寺に用いられた瓦がどこで焼かれたかわからなかったが、この調査によってはじめてその生産地が明らかになった。隼上り瓦窯跡と豊浦寺とは、直線距離にして約90kmもあり、水上交通を利用して運んだものと推定されている。

隼上り瓦窯跡の調査では、3基の窯跡と瓦を生産したと考えられる工房跡が見つかっている。瓦窯跡は、床が階段状になっている瓦専用窯1基と床が平らな瓦陶兼用窯2基からなっている。いずれも登窯で、窯から出る灰原から多量の瓦が出土している。窯の周囲には溝が掘られており、煙道がその溝に直接連なっている。そこには、多孔式の煙だし穴が設けられていることから、発掘担当者は、この地に^(注3)何かの施設を考えている。

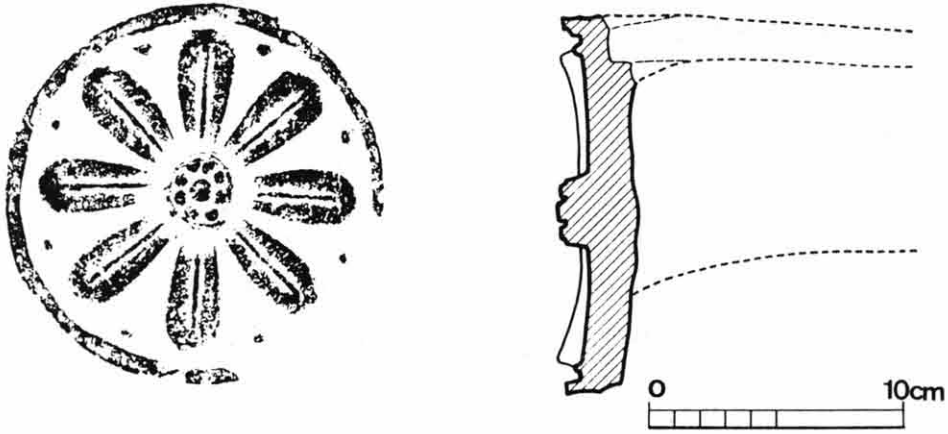
工房跡は、窯跡のあるところよりも南西の地で見つかった



第1図 遺跡所在地 (1/25,000)



第2図 遺跡全体略図（宇治市教育委員会『飛鳥へ運ばれた瓦』より再トレース）



第3図 単上り瓦窯跡出土軒丸瓦拓影及び実測図（注3書・図版第12より）

ている。工房跡では全部で7棟の掘立柱建物跡が見つただけでなく、瓦や土器を作るための粘土を貯蔵しておいたと思われる方形の穴や、そこに谷から水を引いてくる溝跡も確認された。飛鳥時代の瓦を作った工房跡は全国的にみても見つかっておらず、貴重な調査成果となった。

現在、単上り瓦窯跡は、1号窯跡と2号窯跡の間でもう1基窯跡が見つかっており、それも含めて国史跡に指定されている。（土橋 誠）

注1 『飛鳥へ運ばれた瓦—宇治単上り瓦窯跡の発掘調査—』 宇治市教育委員会 1983

注2 福山敏男「豊浦寺の創立」(同『日本建築史研究』所収 墨水書房)

注3 『単上り瓦窯跡発掘調査概報』(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第3集 宇治市教育委員会) 1983

長岡京跡調査だより

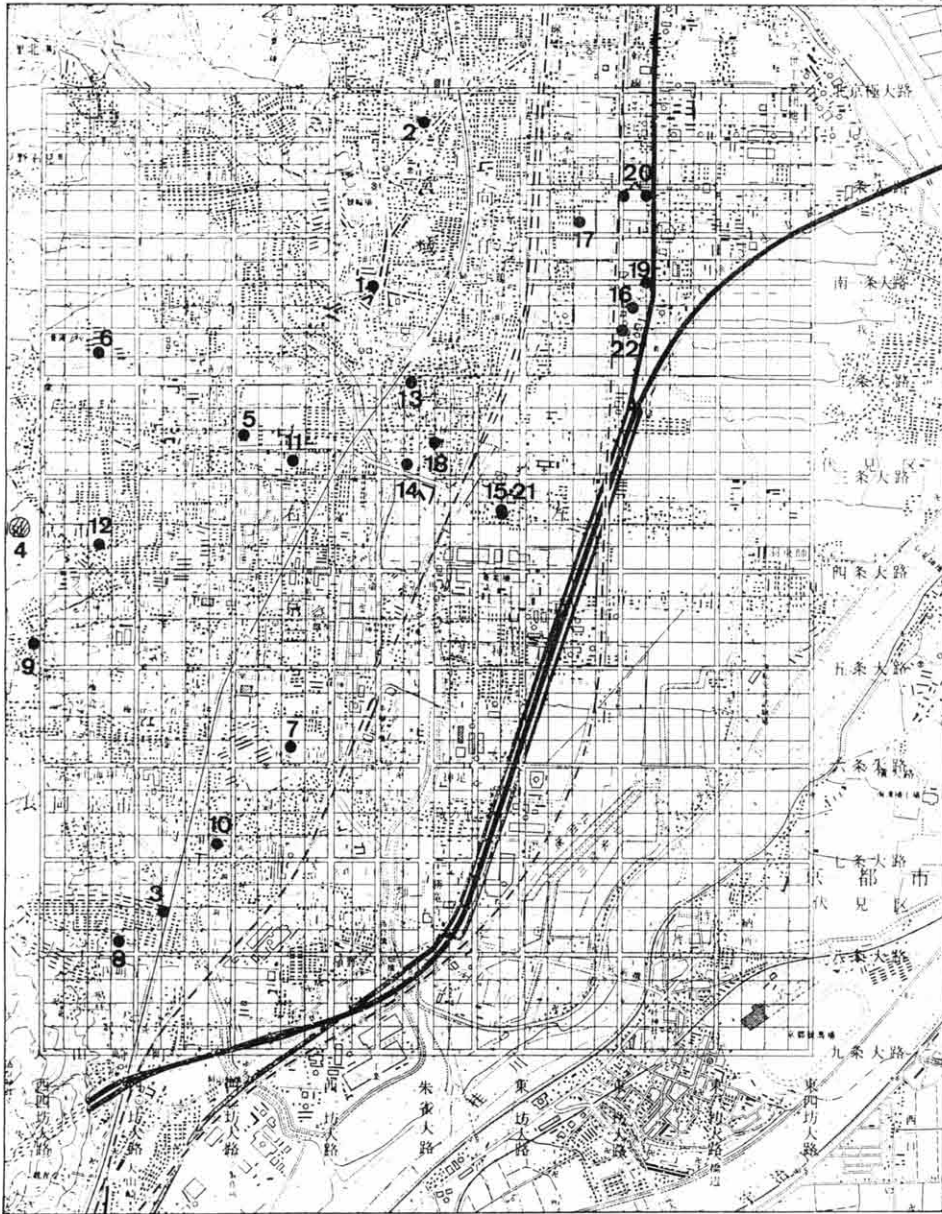
11月も過ぎ、あちこちで初雪の便りが聞かれるようになりました。この9月から11月の3か月間に行われた長岡京跡の調査は、宮域2件・右京域12件・左京域8件の計22件あります。これらの調査では、長岡京の条坊側溝や井戸、弥生時代の高地性集落跡等が検出されています。また、大山崎町教育委員会では、遺跡確認第8次調査を行っています。

それでは、以下に、9月24日・10月22日・11月26日の長岡京連絡協議会で報告された主要な調査成果について、簡単に概要を記します。

調査地一覧表

番号	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第180次	7AN14O	向日市寺戸町南山	向日市教委	61. 9. 1～9. 3
2	宮内第181次	7AN11I	向日市寺戸町殿長	向日市教委	61.10. 8～10.18
3	右京第234次	7ANSTE-5	大山崎町円明寺鳥居前63	大山崎町教委	61.10. 1～10. 6
4	右京第237次	7ANJNN	長岡京市長法寺谷山地内	(財)長岡京市埋	61. 7. 7～10.23
5	右京第239次	7ANIKC-4	長岡京市今里北ノ町1-5	(財)長岡京市埋	61. 8.18～9.13
6	右京第240次	7ANGAR-4	長岡京市井ノ内朝日寺11	(財)京都府埋	61. 9.11～11.17
7	右京第241次	7ANMSI-8	長岡京市開田4丁目415	(財)長岡京市埋	61.10.24～11.21
8	右京第242次	7ANSTM	大山崎町円明寺小字殿山	大山崎町教委	61.10. 8～10.11
9	右京第243次	7ANPTM	長岡京市奥海印寺大鼓山14	(財)長岡京市埋	61. 9.25～10. 2
10	右京第244次	7ANNMC-2	長岡京市友岡4丁目224-2	(財)長岡京市埋	61. 9.24～10.25
11	右京第245次	7ANINE-3	長岡京市野添1丁目49-1	(財)長岡京市埋	61.10.15～11.15
12	右京第246次	7ANJSH	長岡京市長法寺芝端	(財)長岡京市埋	61.11. 4～11.20
13	右京第247次	7ANFNM-3	向日市上植野町野上山	向日市教委	61.11. 6～11.10
14	右京第248次	7ANFKR-2	向日市上植野町吉備寺	向日市教委	61.11.17～11.18
15	左京第155次	7ANFBD	向日市上植野町伴田	向日市教委	61. 8.20～9.27
16	左京第156次	7ANEIS-2	向日市鶏冠井町石橋17・18	向日市教委	61. 8.12～9.17
17	左京第157次	7ANDKG-4	向日市森本町小柳	向日市教委	61. 8.26～9.10
18	左京第158次	7ANFMZ	向日市上植野町南小路37	向日市教委	61. 9.16～10.13
19	左京第159次	7ANENR-2	向日市鶏冠井町西金村	向日市教委	61. 9.26～11.15
20	左京第160次	7ANDTD	向日市森本町佃地内	(財)京都府埋	61.10.18～12. 3
21	左京第161次	7ANFBD-2	向日市上植野町伴田 ^{15-1,} ₁₆₋₃	向日市教委	61.10.27～11.29
22	左京第162次	7ANEKD	向日市鶏冠井町小深田25	向日市教委	61.10.29～12. 3

長岡京条坊復原図



数字は本文（ ）内と対応

宮内第181次（2）

向日市教育委員会

長岡宮跡の北辺官衙地区に位置する。宮内第 117 次調査で検出された長岡京期の東西溝SD11711の東の延長部分を確認した。この溝は、宮内道路の南側溝に当るものかと推定されている。

遺物は、長岡京期の土師器・須恵器・墨書土器・製塩土器等のほか、弥生時代後期の土器が出土している。

右京第237次（4）

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

向日丘陵や東山丘陵、そして南山城地域が眺望できる丘陵上に位置し、弥生時代後期の集落跡が検出された。

この調査では、弥生時代後期の竪穴式住居跡 7 基、掘立柱建物跡 1 棟、土塚 1 基を検出したほか、平安時代初期の火葬墓 1 基が検出されている。

竪穴式住居跡 7 基のうち 1 基は、一辺4~5mを測る五角形住居で、中央に炉を持ち、貯蔵穴・壁溝を備えている。また、この住居跡の南西部壁際には、出入口に伴う施設かと思われる小さな柱穴が 4 か所ある。このほか、円形の住居跡 1 基、方形の住居跡が 5 基検出されている。円形の住居跡は、径約10mを測る 6 本柱の大型住居である。壁溝を備え、いわゆる中央ピットとそれから延びる溝を持っている。方形の住居跡 5 基のうち 2 基は、2 本柱のやや小型の住居である。掘立柱建物跡は、1 間×3 間の規模で、7 基の竪穴式住居に囲まれるように位置している。

遺物は、竪穴式住居跡や土塚内から、弥生土器やミニチュア土器・砥石(荒砥・仕上砥)・石鏃・土笛状土製品・板状鉄斧・鉄製鋏先等が出土している。板状鉄斧は五角形住居から、鉄製鋏先と土笛状土製品は円形の大型住居からそれぞれ出土した。なお、検出された 7 基の竪穴住居跡の大部分は、焼失家屋である。

火葬墓は、長方形の土塚の中央に、土師器の皿で蓋をした土師器の甕が倒立して安置され、甕の中に、人骨と灰が多量に詰まった状態で検出された。

この調査は、10月19日(日)に現地説明会が開催されている。

右京第239次（5）

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京の三条条間小路南側溝や長岡京期の掘立柱建物跡、鎌倉

時代の溝・土壇・礫面、室町時代の溝等が検出された。

掘立柱建物跡は、南に廂を持つ梁行3間の東西棟の建物である。三条条間小路南側溝から、約3m南の位置に建っている。三条条間小路南側溝は、幅約1.5m前後の溝で、鎌倉時代の東西溝がその位置を踏襲して掘られている。

遺物は、木簡や斎串・人形・箸・銭貨(和同開珎・神功開寶)・製塩土器・土馬・刀子・種子・獣骨等が出土している。

右京第240次(6)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査地は、京都府立向日ヶ丘養護学校内に位置し、長岡京の右京二条四坊六町に当る。この調査では、長岡京期の井戸・ピット、中世の湿地状堆積を検出したにとどまった。後世の削平を受けて深さの浅い遺構は消失したものと考えられる。

長岡京期の井戸は一辺約5.8mの方形の掘形を持ち、三段に掘られている。深さは、6m以上を測る。三段目の掘形も方形を呈し、一辺2m前後を測る。この三段目の掘形内から、縦板組みの井戸枠が半壊状態で検出された。この井戸は、上層の井戸枠を引き抜いた後、一度に埋め戻している。その際、周辺古墳時代の遺構を削って埋めたことが、埋土中に古墳時代の遺物を含んでいることから判る。

遺物は、須恵器・土師器・瓦器・陶器・緑釉陶器・土馬・ミニチュアかまど・鉄器(鋤先)・井戸碎片等があり、大半が井戸から出土している。

右京第241次(7)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

中世の溝・土壇・ピット等が検出されている。

右京第244次(10)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

平安時代の溝やピット、奈良時代の掘立柱建物跡・溝・土壇等が検出された。この地は、鞍岡廃寺の推定地にも当り、奈良時代の建物跡等は、この寺跡と関連したものと推定されている。

右京第245次(11)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

中・近世の溝や、長岡京期・弥生時代の溝が検出された。遺物は、須恵器・土師器・瓦器・弥生土器のほか、石鏃やサヌカイト剝片・種子(ウリ・カシ)等が出土している。

- 右京第246次 (12) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
調査地は、長岡京の右京四条四坊五・六町及び四条第2小路の推定地に当る。長岡京期の井戸等が検出された。井戸は、井籠組みのもので、井戸枠は、一辺約1.1mを測り、二段残存していた。遺物は、土師器・須恵器・曲物・櫛・斎串・土錘・製塩土器等が出土している。
- 左京第155次 (15) 向日市教育委員会
調査地は、長岡京の左京四条一坊十・十五町及び東一坊第1小路の推定地に当る。
この調査では、中世の溝、長岡京期の南北溝・2間×1間以上の南北棟の掘立柱建物跡1棟、古墳時代の竪穴式住居跡等が検出された。長岡京期の掘立柱建物跡は、東一坊第1小路の計画心上に位置している。南北溝は、この建物の西方で検出され、幅約2m・深さ約0.5mを測る。
- 左京第156次 (16) 向日市教育委員会
調査地は、長岡京の左京二条三坊一町及び二条第1小路の推定地に当たるとともに、鶏冠井遺跡にも含まれている。
この調査では、長岡京期の東西溝やピット、縄文時代晩期の土壇・包含層等が検出された。このほか流路からは、弥生土器片が出土している。
- 左京第157次 (17) 向日市教育委員会
長岡京期の建物跡をまとめて検出した左京第118次調査地に隣接し、長岡京の左京南一条二坊十町の推定地に当る。
検出された遺構には、長岡京期の掘立柱建物跡・曲物井戸、弥生時代中期の自然流路等がある。掘立柱建物跡は、梁行2間・桁行4間以上の東西棟で、柱間距離は、桁行約2.25m・梁行約2.55mを測り、柱掘形も一辺約0.8~1mと大きなものである。曲物井戸は、直径約0.5mを測り、底には径5cm程度の礫を敷きつめていた。
またほかに、縄文土器片も検出されている。
- 左京第159次 (19) 向日市教育委員会
この調査地は、長岡京の左京二条三坊一町・南一条三坊四町及

び南一条大路と東三坊第1小路の交差点の推定地に当る。

この調査では、長岡京の南一条大路南北両側溝・東三坊第1小路西側溝、長岡京期の掘立柱建物跡・柵列跡・井戸、古墳時代前期の溝、弥生時代の自然流路等が検出された。

南一条大路南北両側溝は、溝心々間距離が約24.8mあり、北側溝が幅約1.2m・南側溝が幅約1.3mを測る。東一坊第1小路西側溝は、幅約0.5～0.8mの溝で、南一条大路北側溝に流れ込んで途切れる。掘立柱建物跡は、東西3間・南北2間の東西棟で、柱間距離は、東西約2.1m・南北約2.1～2.7mを測っている。井戸は、一辺約0.4mの方形の曲物を井戸枠としたもので、掘形は、一辺約0.6～0.7mの方形を呈している。また、縦板組みの井戸も検出されている。

出土遺物には、須恵器・土師器・弥生土器・縄文土器・瓦器・墨書土器・砥石・神功開寶・櫛・斎串・陽物状木製品・箸・木簡・種子等がある。墨書土器には、「大炊」と記されたものが出土している。

なお、この調査については、10月25日(土)に現地説明会が開催されている。

左京第160次 (20)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

長岡京の東二坊大路と東三坊第1小路の推定地を調査した。

この調査では、長岡京期の南北溝2条・落ち込み、長岡京期以前の自然流路等を検出した。また、下層から弥生土器が出土している。長岡京期の南北溝は、それぞれ東二坊大路東側溝と東三坊第1小路西側溝の可能性が高い。

遺物は、弥生土器・土師器・須恵器等のほか、緑釉陶器の羽釜片が出土している。

左京第161次 (21)

向日市教育委員会

左京第155次調査で長岡京期の遺構等が検出されたことから、新たに調査地を拡張して行われた調査である。

前回調査で検出されていた掘立柱建物跡は、南北5間・東西2間の南北棟の建物であることが判明した。また、この建物の北に、東西2間・南北2間以上の建物跡が柱筋を揃えて存在しているこ

とも判明した。両建物とも、柱間距離は約3mを測る。前回検出されていた南北溝も、北への延長が確認された。この溝は、幅約2m・深さ約0.5mを測る。古墳時代の竪穴式住居跡も計5基検出され、また新たに、土器棺が1基検出された。

左京第162次 (22)

向日市教育委員会

長岡京の二条条間大路と東二坊大路の交差点の推定地に当り、東二坊大路西側溝と二条条間大路の側溝等が検出されている。溝内からは、墨書人面土器や土馬・人形・獣骨・鉄鏃等、祭祀的な遺物がまとまって出土している。また、木簡や縄文土器等も出土している。

大山崎町遺跡範囲確認調査第8次

大山崎町教育委員会

中・近世の溝や、平安時代中期の溝・土坑等が検出された。遺物は、瓦・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器等が出土している。調査地の遺構面は、西から東に向ってやや傾斜し、遺物は西半部で多く出土している。調査地の西側に遺構が存在しているものと推定されている。

なお、調査地の西約10mには、西国街道が走っている。

(山口 博)

センターの動向 (61. 9～11)

1. できごと

9. 1 尊勝寺跡(京都市)発掘調査開始
芝山遺跡(城陽市)発掘調査終了 5. 6～
9. 5 綾中遺跡(綾部市)発掘調査現地説明会実施
9. 6 ゲンギョウの山古墳群(弥栄町)発掘調査現地説明会実施
9. 11 長岡京跡右京第 240 次(長岡京市)発掘調査開始
9. 11～12 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(館山市)出席(小山主任調査員・安達主事・長関囑託)
9. 12 綾中遺跡発掘調査終了 5. 17～
9. 17 中城館跡(綾部市)発掘調査開始
9. 24 長岡京連絡協議会開催
9. 26 全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(東京)出席(荒木事務局長)
9. 30 上中遺跡(京北町)発掘調査終了 8. 11～
10. 2 ゲンギョウの山古墳群発掘調査終了 6. 4～
10. 4 菩提 1・2 号地点(木津町)試掘調査開始
10. 6 平安京跡(京都市)発掘調査開始
10. 9 蒲生遺跡(丹波町)発掘調査終了 8. 25～
10. 11 志高遺跡(舞鶴市)・栗ヶ丘古墳群(綾部市)発掘調査現地説明会開催
10. 14 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター主催木器研究会開催(於・当センター)
10. 17 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(枚方市)出席(荒木事務局長・杉原課長補佐)
10. 18 長岡京跡左京第 160 次(向日市)発掘調査開始
10. 22 長岡京連絡協議会開催
10. 23 田辺城跡(舞鶴市)試掘調査開始
10. 25 第37回研修会開催(別掲)
10. 27 全国埋蔵文化財法人連絡協議会考古資料展(仮称)検討委員会(大阪市)出席(杉原課長補佐)
10. 28 臨時理事会一於：京都堀川会館一福山敏男理事長，樋口隆康副理事長，川上 貢・藤井 学・中沢圭二・足利健亮・佐原 真・原口正三・藤田价浩・小嶋一夫・武田 浩・堤圭三郎の各理事，荒木昭太郎常務理事出席
10. 30 田辺城跡試掘調査終了
11. 1 馬得志(中国社会科学院考古研究所西安研究室主任)・陳全方(中国陝西省文物局副局长)・王仁波(中国陝西省博物館館長)の各氏，当埋蔵文化財調査研究センターを訪問
11. 5 長岡京跡右京第 240 次発掘調査関係者説明会実施
11. 5～6 全国埋蔵文化財法人連絡協議会(東京)出席(荒木事務局長・杉原課長補佐)
11. 7 久保田遺跡(田辺町)発掘調査開始

11. 8 古殿遺跡(峰山町)発掘調査現地説明会実施
11. 11 長岡宮・大極殿祭出席(荒木事務局長・中西総務課長)
11. 12 全国埋蔵文化財法人連絡協議会コンピュータ等導入研究委員会(東京)出席(山口主任調査員・土橋調査員)
11. 14 両丹文化財保護連絡協議会(福知山市)出席(中谷調査課長)
11. 17 長岡京跡右京第240次発掘調査終了
11. 18 全国埋蔵文化財法人連絡協議会考古資料展(仮称)検討委員会近畿ブロック会(大阪市)出席(杉原課長補佐)
11. 20 西小田古墳群(丹後町・弥栄町)発掘調査開始
11. 22 瓦谷遺跡(木津町)・尊勝寺跡(京都市)発掘調査現地説明会実施
11. 25 長岡京跡左京第160次発掘調査関係者説明会実施
11. 26 菩提1・2号地点試掘調査終了
長岡京連絡協議会開催
11. 28 野崎遺跡(綾部市)発掘調査開始
2. 普及啓発事業
10. 25 第37回研修会—大阪北部の遺跡を訪ねて—開催
宇治田和生—禁野車塚古墳・百濟寺跡・牧野車塚古墳
原口 正三—岡本山古墳・郡家今城遺跡・今城塚古墳・継体天皇陵古墳・茨木市立文化財資料館

府下報告書等刊行状況一覽(61.1~12)

発掘調査報告書関係

- 『中之段4号墳』 福知山市教育委員会 1986.3
- 『福知山城跡』 同上 1986.3
- 『福知山城内堀跡』 同上 1986.3
- 『京都市遺跡地図台帳』 京都市文化観光局 1986.3
- 『埋蔵文化財発掘調査概報(1986)』 京都府教育委員会 1986.3
- 『長岡京市文化財調査報告書』 第17冊 長岡京市教育委員会 1986.3
- 『史跡高麗寺跡第2次範囲確認調査概報』 山城町教育委員会 1986.3
- 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』 第14集 城陽市教育委員会 1986.3
- 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』 第15集 同上 1986.3
- 『向日市埋蔵文化財調査報告書』 第18集 向日市教育委員会 1986.3
- 『中上司遺跡Ⅱ』 加悦町教育委員会 1986.3
- 『千原遺跡第2次』(岩滝町文化財調査報告 第8集) 岩滝町教育委員会 1986.3
- 『宮津城跡第5次発掘調査概要』(宮津市文化財調査報告 第11集) 宮津市教育委員会
1986.3
- 『大鳳寺跡第6次発掘調査概報』(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第9集) 宇治市教育
委員会 1986.3
- 『百久保地先遺跡第1次発掘調査概報』(京都府精華町埋蔵文化財調査報告書 第1集)
精華町教育委員会 1986.3
- 『網野町の遺跡(埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書)』(京都府網野町文化財調査報告 第
4集) 網野町教育委員会 1986.3
- 『平安京跡発掘調査概報 昭和60年度』 京都市埋蔵文化財調査センター 1986.3
- 『中臣遺跡発掘調査概報 昭和60年度』 同上 1986.3
- 『鳥羽離宮跡発掘調査概報 昭和60年度』 同上 1986.3
- 『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報 昭和60年度』 同上 1986.3
- 『醍醐古墳群発掘調査概報 昭和60年度』 同上 1986.3
- 『御堂ヶ池古墳群・音戸山古墳群発掘調査概報 昭和60年度』 同上 1986.3
- 『京都市内遺跡試掘立合調査概報 昭和60年度』 同上 1986.3
- 『左京七条一坊十三町平安京東市外町の調査』 学校法人平安学園平安中・高等学校

1986. 3

当調査研究センター現地説明会・中間報告資料

現地説明会

- 「志高遺跡」(京埋セ現地説明会資料 No.86-01) 1986. 1. 25
「芝山遺跡」(同 No.86-02) 1986. 3. 6
「桃山古墳群」(同 No.86-03) 1986. 5. 24
「正垣遺跡」(同 No.86-04) 1986. 6. 12
「宮の森古墳群」(同 No.86-05) 1986. 7. 12
「芝山遺跡」(同 No.86-06) 1986. 7. 26
「綾中遺跡」(同 No.86-07) 1986. 9. 5
「ゲンギョウの山古墳群」(同 No.86-08) 1986. 9. 6
「志高遺跡」(同 No.86-09) 1986. 10. 11
「栗ヶ丘古墳群」(同 No.86-10) 1986. 10. 11
「古殿遺跡」(同 No.86-11) 1986. 11. 8
「瓦谷遺跡」(同 No.86-12) 1986. 11. 22
「尊勝寺跡」(同 No.86-13) 1986. 11. 22

中間報告

- 「木津遺跡」(京埋セ中間報告資料 No.86-01) 1986. 1. 14
「木津地区所在遺跡」(同 No.86-02) 1986. 1. 17
「篠・西前山窯跡」(同 No.86-03) 1986. 2. 21
「畑山2号墳(京奈)」(同 No.86-04) 1986. 2. 27
「栗ヶ丘古墳群」(同 No.86-05) 1986. 3. 19
「長岡宮跡第172次」(同 No.86-06) 1986. 6. 13
「長岡京跡左京第151次」(同 No.86-07) 1986. 7. 24
「長岡京跡左京第151次(2)」(同 No.86-08) 1986. 8. 20
「木津川河床遺跡」(同 No.86-09) 1986. 8. 28
「長岡京跡右京第240次」(同 No.86-10) 1986. 11. 4
「長岡京跡左京第160次」(同 No.86-11) 1986. 11. 25
「千代川遺跡第12次」(同 No.86-12) 1986. 12. 2
「八ヶ坪遺跡」(同 No.86-13) 1986. 12. 4

府下現地説明会資料

- 「大田鼻東横穴群発掘調査」 京都府教育委員会 1986. 6. 21
「高山1号墳発掘調査」 同上 1986. 9. 6
「佐川印刷株式会社ビル新築に伴う埋蔵文化財発掘調査」 向日市教育委員会 1986. 5. 20
「長岡京跡左京第176次(7AN11H)調査 殿長遺跡第2次」 同上 1986. 7. 26
「長岡京跡左京第159次(7ANENR-2地区)」 同上 1986. 10. 25
「長法寺遺跡 長岡京跡右京第228次調査」 長岡京市教育委員会 1986. 5. 10
「鳥居前古墳」 大山崎町教育委員会・大阪大学鳥居前古墳調査団 1986. 8. 10
「芝ヶ原12号墳発掘調査」 城陽市教育委員会 1986. 8. 2
「駅南開発に伴う発掘調査(1)」 福知山市教育委員会 1986. 7. 9
「広峯古墳群発掘調査」 同上 1986. 10. 18
「青野遺跡第10次調査」 綾部市教育委員会 1986. 12. 6
「カルビ古墳」 伊根町教育委員会 1986. 8. 23
「三宅遺跡第3次発掘調査」 網野町教育委員会 1986. 8. 29
「長法寺谷山遺跡」 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1986. 10. 19
「鴨谷東1号墳第1次調査」 立命館大学文学部 1986. 8. 23
「京都大学本部構内の遺跡—AX30区発掘調査—」 京都大学構内遺跡調査会 1986. 10.

22

その他の雑誌・報告・論文等

- 『京都府埋蔵文化財情報』第19号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986. 3
『京都府埋蔵文化財情報』第20号 同上 1986. 6
『京都府埋蔵文化財情報』第21号 同上 1986. 9
『京都府埋蔵文化財情報』第22号 同上 1986. 12
『考古展 第5回小さな展覧会』 同上 1986. 8
『八幡市誌』 八幡市 1986. 1
『京都市の文化財』 京都市文化観光局文化財保護課 1986. 1
『京都市文化財だより』第5～6号 同上 1986. 6～10
『私たちの考古学1—京都府北部の発掘調査—』 京都府立丹後郷土資料館 1986. 4
『鎌倉時代の丹波・丹後(特別陳列図録19)』 同上 1986. 7
『丹後郷土資料館報』第7号 同上 1986. 3

- 『特別展図録17農山漁村の女たち』 同上 1986.10
- 『丹後郷土資料館だより』第13号 同上 1986.3
- 『資料館紀要』第14号 京都府立総合資料館 1986.3
- 『京都府資料目録追録』No.2 同上 1986.3
- 『年表 加茂町の歴史と文化』 加茂町役場 1986.3
- 『京都府立山城郷土資料館だより』第5号 京都府立山城郷土資料館 1986.9
- 『企画展燈明寺の文化財』 同上 1986.4
- 『山城郷土資料館報』第4号 同上 1986.4
- 『発掘成果速報』 同上 1986.9
- 『特別展示図録5 山城町の歴史と民俗』 1986.10
- 『向日市文化資料館研究紀要』創刊号 向日市文化資料館 1986.3
- 『第2回特別展示図録よみがえる古代の文字』 同上 1986.10
- 『久御山町史』第1巻 久御山町教育委員会 1986.3
- 『みやづの文化財第二集—歴史と文化財—』 宮津市教育委員会 1986.3
- 『特別展宮津の近世絵図』 同上 1986.11
- 『京都の美術工芸 京都市内編』下 (財)京都府文化財保護基金 1986.3
- 『文化財報』No.52~No.54 同上 1986.2~8
- 『京都の文化財』第4集 京都府教育委員会 1986.3
- 『京都府古文書緊急調査報告東寺観智院金剛蔵聖教の概要』 同上 1986.3
- 『京都府古文書等緊急調査報告東寺観智院金剛蔵聖教目録二一』 同上 1986.3
- 『舞鶴市の文化財』 舞鶴市教育委員会 1986.3
- 『泉屋博古館紀要』第3巻 泉屋博古館 1986.3
- 『よみがえる古墳文化』 宇治市歴史資料館 1986.10
- 『昭和60年度宇治市歴史資料館年報』 同上 1986.10
- 『福知山市文化資料館資料収蔵目録 第2集(養蚕)』 福知山市文化資料館 1986.7
- 『開館1周年記念特別展示図録』 亀岡市文化資料館 1986.11
- 『丹波史談』第121号 口丹波史談会 1986.3
- 『波布理首能』第3号 精華町の自然と歴史を学ぶ会 1986.3
- 『志くれてい』第18号 (財)冷泉家時雨亭文庫 1986.9
- 『土車』第37~39号 (財)古代学協会 1986.1~7
- 『丹波史何鹿郡之部』 綾部史談会 1986.3
- 『舞鶴市史編さんだより』No.161~No.171 舞鶴市史編さん室 1986.1~11

『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』 京都大学埋蔵文化財研究センター 1986.

3

『京都市歴史資料館紀要』 第3号 京都市歴史資料館 1986. 6

『宇治田原町史』 資料篇第1集 宇治田原町史編さん委員会 1986. 7

『宇治田原町史』 資料篇第2集 同上 1986. 11

受贈図書一覧 (61. 7. 20～61. 11)

(財)北海道埋蔵文化財センター	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第24～34集
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	紀要Ⅵ, 岩手県文化振興事業団調査報告書 第94～103集, 考古遺物資料集 第6集
(財)いわき市教育文化事業団	いわき市埋蔵文化財調査報告 第14冊
(財)茨城県教育財団	年報5, 茨城県教育財団文化財調査報告 第30～37集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	元島名B・吹き屋遺跡, 昭和61年度出土文化財巡回展示会展示解説書, 中畦・諏訪西遺跡, 年報5
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	研究紀要1986, 年報6, 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第52～58・60集
(財)千葉県文化財センター	研究紀要10, 研究連絡誌 第15・16号, 市原市門脇遺跡, 富里町南内野遺跡, 東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ, 常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ～Ⅴ, 栗源町外部台遺跡, 主要地方道成田松尾線Ⅲ～Ⅳ, 君津市岩田遺跡・岩田城跡, 八千代市ヲサル山遺跡, 千原台ニュータウンⅢ, 千葉市中薮遺跡, 千葉都市モノレール関係埋蔵文化財発掘調査報告書, 千葉市刃田山谷遺跡, 千葉市荒屋敷北貝塚・谷津上・須摩堀遺跡, 千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ, 多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書, 酒々井町伊篠白幡遺跡, 加曽利貝塚
(財)市原市文化財センター	大羽根城郭跡, 潤井戸西山遺跡, 山田大宮遺跡
(財)東京都埋蔵文化財センター	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第7集, 研究論集Ⅳ
神奈川県立埋蔵文化財センター	年報5, 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 11～12
石川県立埋蔵文化財センター	年報6, 三井小泉遺跡, 漆町遺跡Ⅰ, 佐々木ノテウラ遺跡, 近岡遺跡, 剣崎遺跡, 岩内遺跡, 戸水C遺跡, 軽海遺跡, 徳前C遺跡, 井田堂坂遺跡, 寺家遺跡
(財)滋賀県文化財保護協会	金剛遺跡発掘調査報告書Ⅰ, 昭和60年度滋賀県遺跡地図, 湖岸堤矢橋工区埋蔵文化財試掘調査概要報告書, 井戸遺跡(第2次)発掘調査報告書, 近江大橋有料道路建設工事に伴う草津市墓ノ町遺跡発掘調査報告書, 大江湖底遺跡発掘調査報告書, 赤野井消波堤工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書赤野井湾遺跡, 湖岸堤(赤野井南工区)工事に係る埋蔵文化財試掘調査概要報告書赤野井湾遺跡, 赤野井港建設に係る埋蔵文化財発掘調査概要報告書赤野井湾遺跡, 尼子南遺跡発掘調査概要Ⅰ, 草津川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要御倉・北萱地区

守山市立埋蔵文化財センター (財)大阪文化財センター	守山市文化財調査報告書 第8・9・19・22冊 佐堂(その2), 亀井(その2), 亀井北(その2), 真福寺遺跡, 久宝寺南(その3), 山賀(その5・6), 小阪遺跡(その1), 丹上遺跡(その1), 同(その2), 松原市観音寺遺跡写真集第2発掘調査概報, 城山(その2), 河内の遺宝—近畿自動車道関連遺跡出土遺物写真集, 第4回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料 神並遺跡 I
(財)東大阪市文化財協会 (財)八尾市文化財調査研究会 (財)大阪府埋蔵文化財協会	(財)八尾市文化財調査研究会報告 8~9 (財)大阪府埋蔵文化財協会報告 第4~5輯, (財)大阪府埋蔵文化財協会調査事業報告 第2冊
奈良国立文化財研究所	飛鳥の石造物, 飛鳥・藤原宮発掘調査概報16, 奈良国立文化財研究所学報 第44冊
広島県立埋蔵文化財センター (財)北九州市教育文化事業団	亀山遺跡 第5・6次発掘調査概報, 備後国府跡推定地にかかる第4次調査概報 北九州市埋蔵文化財調査報告書 第44~53集, 埋蔵文化財調査室年報2
苫小牧市教育委員会	苫小牧東部工業地帯埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ昭和59年度版, 苫小牧東部工業地帯埋蔵文化財分布調査報告書昭和59年度版
胆沢町教育委員会 いわき市教育委員会 郡山市教育委員会	宇南田遺跡調査報告書 いわき市埋蔵文化財調査報告 第13冊 郡山東部6, 県営ほ場整備事業関連発掘調査概報—下河原遺跡・助市田遺跡・台東遺跡, 巳六段遺跡発掘調査報告書, 北山田遺跡発掘調査概報, 北山田2号墳発掘調査概報, 清水台遺跡発掘調査概要, 下永田B遺跡発掘調査報告書
志木市教育委員会 大島町教育委員会	志木市遺跡調査会調査報告 第1~2集 大島町鉄砲場岩陰遺跡, 下高洞遺跡調査報告3東京都大島町下高洞遺跡
今立町教育委員会 小浜市教育委員会 境川村教育委員会 長野市教育委員会 愛知県教育委員会 名古屋市教育委員会	今立町埋蔵文化財調査報告 第2集 府中遺跡調査概報 境川村埋蔵文化財発掘調査報告書 第3輯 長野市の埋蔵文化財 第18集 愛知県古窯跡群分布調査報告(V) 旧名古屋城下町遺構発掘調査概要報告書(V), 正木町遺跡発掘調査概要報告書, 尾張元興寺跡Ⅱ次発掘調査概要報告書, 第Ⅲ次豎三蔵通遺跡発掘調査概要報告書, 伊勢山中学校遺跡Ⅱ, NN-268号窯

五個荘町教育委員会
彦根市教育委員会
八日市市教育委員会
蒲生町教育委員会
能登川町教育委員会
秦荘町教育委員会

今津町教育委員会
米原町教育委員会
大阪府教育委員会

泉佐野市教育委員会

岸和田市教育委員会

跡発掘調査概要報告書

五個荘町文化財調査報告 6～7

彦根市埋蔵文化財調査報告 第8～9・11集

八日市市文化財調査報告(7)

蒲生町文化財資料集(4)

能登川町埋蔵文化財調査報告書 第1～6集

軽野正境遺跡発掘調査報告書, 島川遺跡発掘調査概要報告書, 秦荘町文化財調査報告書 第2集

今津町文化財調査報告書 第5～6集

米原町埋蔵文化財調査報告書 V

府営松原天美住宅建替に伴う大和川今池発掘調査概要・II, 三田遺跡試掘調査概要, 今木廃寺跡発掘調査概要, 府中遺跡発掘調査概要, 東山遺跡試掘調査報告書, 和気遺跡発掘調査概要報告書, 軽部池遺跡試掘調査概要報告書・II, 石川左岸幹線管渠造遺跡群発掘調査概要・I, 宮之前遺跡発掘調査概報, 挾山遺跡発掘調査概要・V, 大分川今池遺跡発掘調査概要, 萱振遺跡発掘調査概要・I, 昭和157年度はさみ山遺跡発掘調査概要, 林遺跡発掘調査概要 I・V, 泉北ニュータウン内柵地区TG41号窯発掘調査概要, 西大井遺跡第3次発掘調査概要, 喜志遺跡・東阪田遺跡発掘調査概要・VI, 田辺遺跡発掘調査概要・I, 泉南郡岬町所在淡輪遺跡発掘調査概要・V, 国府遺跡発掘調査概要・VIII, 土師の里遺跡発掘調査概要, 同・V, 高屋城址発掘調査概要・V～VI・VII, 国府遺跡発掘調査概要・IX, 西浦橋・鶴田池東遺跡発掘調査概要, 一般国道309号建設に伴う甲田南遺跡発掘調査概要報告書, 池上・曾根遺跡発掘調査概要・XV, ツゲノ遺跡発掘調査概報・I, 池上遺跡—遺跡南部における調査—, 住吉遺跡発掘調査概要, 観音寺遺跡発掘調査報告書, 大園遺跡発掘調査概要・VII, 一須賀・葉室古墳群, 錦織遺跡発掘調査概要, 板原遺跡発掘調査概要, 河南西部地区農地造成事業に伴う寛弘寺古墳群発掘調査概要・II, 府道松原・泉大津線建設に伴う鶴田東遺跡発掘調査概要・II, 大阪府立大塚高等学校建設に伴う大塚遺跡発掘調査概要・I, 府立泉大津高等学校増築に伴う七ノ坪遺跡発掘調査概要・III, 大阪府文化財総合目録1985, 大阪府文化財調査概要1983年度, 大阪府文化財分布図

湊遺跡IV, 泉佐野市埋蔵文化財発掘調査報告 VII～VIII,

昭和60年度泉佐野市埋蔵文化財分布調査概要 II・VI

岸和田市文化財調査概要11

富田林市教育委員会	富田林市埋蔵文化財調査報告11
寝屋川市教育委員会	高宮遺跡発掘調査概要報告, 寝屋川市の民俗一年中行事と民家
羽曳野市教育委員会	古市遺跡群Ⅶ, 羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財分布調査概報, 野中寺一塔跡発掘調査報告一
藤井寺市教育委員会	古市古墳群一藤井寺の遺跡ガイドブック No. 1
芦屋市教育委員会	芦屋市文化財調査報告 第14集, 兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和58年度(芦屋市関係分別刷)
宝塚市教育委員会	宝塚の古墳
西紀・丹南町教育委員会	丹波国大山荘現況調査報告Ⅱ
一宮町教育委員会	伊和中山古墳群Ⅰ
新宮町教育委員会	史跡新宮・宮内遺跡保存管理計画策定報告書
豊岡市教育委員会	長谷・ホウジ古墳群, 豊岡市文化財調査概報集(1985)
奈良市教育委員会	奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和60年度, 奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1985
田原本町教育委員会	田原本町文化財調査報告書 第1集, 田原本町埋蔵文化財調査概要3~4, 唐古・鍵ムラの弥生人
香芝町教育委員会	昭和59年度鈴山城跡・鈴山遺跡発掘調査概報, 昭和59年度鶴峯荘第1地点遺跡第1次発掘調査概報, 昭和60年度鶴峯荘第1地点遺跡第2次発掘調査概報, 昭和60年度狐井城山古墳外堤第4次発掘調査概報, 旭ヶ丘Ⅰ
玉湯町教育委員会	出雲玉作跡
新庄村教育委員会	奥土用・神庭谷製鉄遺跡
広島市教育委員会	広島市の文化財 第34~35集
山口県教育委員会	山口県埋蔵文化財調査報告 第88~97集
高知県教育委員会	土佐国衙跡発掘調査報告書 第6集, 高岡山古墳群発掘調査報告書, 宿毛貝塚発掘調査報告書
福岡県教育委員会	豊前国府豊津町文化財調査報告書, 手光長畑遺跡福岡町文化財調査報告書 第2集, 冥加塚遺跡川崎町文化財調査報告書 第2集, 乙植木古墳群Ⅱ須恵町文化財調査報告書 第2集, 木下遺跡筑穂町文化財調査報告書, 三輪町文化財調査報告書 第5集 栗田遺跡, 新延大塚古墳鞍手町文化財調査報告書 第3集, 大宰府史跡 昭和60年度発掘調査概報, 筑紫野バイパス 関係埋蔵文化財調査報告 第1集, 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 6~8, 九州歴史資料館研究論集11
太宰府市教育委員会	大宰府条坊跡Ⅲ太宰府市の文化財第8集
佐賀県教育委員会	佐賀県文化財調査報告書 第84集

多良見町教育委員会	伊木力遺跡第2次発掘調査概報
山鹿市教育委員会	山鹿市立博物館調査報告書 第5集
鹿児島県教育委員会	鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 37～39
大船渡市立博物館	三陸一海の絵馬
北上市立博物館	北上川流域文化シリーズ(8), 北上市立博物館 常設展示解説(歴史の部)
秋田県立博物館	秋田県立博物館館報 昭和60年度
栃木県立博物館	栃木県立博物館研究紀要 第3号
群馬県立歴史博物館	群馬県立歴史博物館年報 第7号
埼玉県立歴史資料館	研究紀要 第8号, 資料館ガイドブック 3
千葉県立房総風土記の丘	千葉県立房総風土記の丘年報 9
千葉市立加曽利貝塚博物館	貝塚博物館紀要 第13号
市立市川考古博物館	昭和60年度市立市川考古博物館年報(年報 No. 14)
	市立市川考古博物館図録14
流山市立博物館	流山市立博物館年報 No. 8
板橋区立郷土資料館	文化財シリーズ 第49～50集
大田区立郷土博物館	特別展なつかしの音蓄音機
出光美術館	出光美術館館報 第53～54号
長岡市立科学博物館	長岡市立科学博物館研究報告 第21号
福井県立博物館	福井県立博物館年報 第1号(昭和59・60年度版)
	第5回特別展「古墳の美—出土鏡を中心に」
福井県立若狭歴史民俗資料館	特別展タッチ・ザ・ニホンカイ—日本海の縄文文化をさぐる
福井県立朝倉氏遺跡資料館	開館5周年記念特別展—乗谷と中世都市
敦賀市立歴史民俗資料館	敦賀市立歴史民俗資料館紀要 創刊号
茅野市尖石考古館	高風呂遺跡
渡辺考古民俗資料館	史友 創刊号
愛知県陶磁資料館	企画展城下町のやきもの—清洲・名古屋の出土品—, 愛知県陶磁資料館研究紀要5, 特別展近世の備前焼き
名古屋市博物館	名古屋市博物館年報 No. 9(昭和60年度)
瀬戸市歴史民俗資料館	瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V
滋賀県立近江風土記の丘資料館	近江出土の施釉陶器—多彩釉・緑釉・灰釉・瀬戸・美濃—
大阪市立博物館	大阪市立博物館報 No. 25, 大阪市立博物館研究紀要 第18冊
神戸市立博物館	神戸市立博物館年報 No. 3(昭和60年度版), 神戸市立博物館研究紀要 第3号, 神戸市立博物館館蔵品目録 美術の部3, 同 考古・歴史の部3, 同 地図の部3

西脇市郷土資料館	西脇市埋蔵文化財調査報告書 2
岡山県立博物館	岡山県立博物館研究報告 第6～7号, 年報 昭和57～59年度
島根県立博物館	西川津遺跡の出土品よりみた古代出雲人のくらし展
瀬戸内海歴史民俗資料館	瀬戸内海歴史民俗資料館紀要 第3号, 瀬戸内海歴史民俗資料館年報1986
九州歴史資料館	九州歴史資料館年報(昭和60年度)
福岡市立歴史資料館	福岡市立歴史資料館年報 No. 14 (昭和60年度) 特別展図録「早良王墓とその時代—墳墓が語る激動の弥生社会—」
北九州市立考古博物館	北九州市立考古博物館年報 1—昭和58・59・60年度— 「青銅器発掘」共伴遺物とその時代
佐賀県立九州陶磁文化館	九州陶磁文化館年報 昭和60年度 No. 5
国學院大學第Ⅱ部考古学研究会	うつわ 創刊号
日本大学文理学部史学研究室	史叢 第37号, 川崎市麻生区岡上小学校遺跡調査略報
立教大学 学校・社会教育講座	Mouseion 32
早稲田大学図書館	古代 第81号
大谷女子大学資料館	収藏品図録Ⅰ, 大谷女子大学資料館報告書 第14～15冊
大手前女子大学	大手前女子大学論集 第20号創立20周年記念
天理大学附属天理参考館	教祖百年祭記念天理大学附属天理参考館図録
島根大学附属図書館	山陰地域研究 第2号 No. 2
九州大学九州文化史研究施設	九州文化史研究所紀要 第31号(考古学関係抜刷集)
熊本大学文学部考古学研究室	玉城遺跡
大宮市遺跡調査会	大宮市遺跡調査会報告 第17集, 同 別冊 3
山武考古学研究所	柳久保遺跡, 前橋市柳久保遺跡群Ⅱ城南住宅団地造成地区内確認調査報告書, 山武考古学研究所年報 No. 3
上野原遺跡調査会	上野原遺跡都立農業高校神代農業内実習棟建設地の調査
円福寺西方遺跡発掘調査会	五段田遺跡Ⅰ 都営西台三丁目団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
本郷遺跡調査団	海老名本郷(Ⅰ)
考古学フォーラム	考古学の広場 第3号
黒川古文化研究所	創立十周年記念誌, 黒川古文化研究所要覧
妙見山麓遺跡調査会	神出一神出古窯址群に関連する遺構群の調査—
(財)由良大和古代文化研究協会	大和国古墳墓取調書
朝鮮学会	朝鮮学報 第119・120輯天理教教祖百年祭記念号
(財)古代学協会	古代文化 通巻第331～334号, 平安京跡研究調査報告 第17輯平安京

博物館等建設推進九州会議	左京六条二坊六町 文明のクロスロード Museum Kyushu 通巻20～21号, 「九州国立博物館」の基本構想案
ヨシダ印刷株式会社	若狭の古寺美術
京都市埋蔵文化財調査センター	平安京跡発掘調査概報 昭和60年度, 中臣遺跡発掘調査概報 昭和60年度, 鳥羽離宮跡発掘調査概報 昭和60年度, 栗栖野瓦窯跡発掘調査概報 昭和60年度, 醍醐古墳群発掘調査概報 昭和60年度, 御堂ヶ池古墳群・音戸山古墳群発掘調査概報 昭和60年度, 京都市内遺跡試掘立合調査概報 昭和60年度
(財)長岡京市埋蔵文化財センター	長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和59年度
京都府教育委員会	京都の文化財(第4集), 京都府古文書等緊急調査報告 東寺観智院金剛藏聖教目録二一, 京都府古文書緊急調査報告 東寺観智院金剛藏聖教の概要, 重要文化財 瀧澤家住宅修理工事報告書
長岡京市教育委員会	長岡京市文化財調査報告書 第17冊
宇治田原町教育委員会	宇治田原町史資料篇 第1～2集
精華町教育委員会	百久保地先遺跡第1次発掘調査概報(京都府精華町埋蔵文化財調査報告書 第1集)
舞鶴市教育委員会	舞鶴市の文化財
宮津市教育委員会	宮津城跡第5次発掘調査概要(宮津市文化財調査報告 第11集), 特別展宮津の近世絵図
岩滝町教育委員会	京都府岩滝町文化財調査報告 第8集
加悦町教育委員会	加悦町文化財調査概要 5
弥栄町教育委員会	奈良岡遺跡第3次発掘調査報告書
京都府立丹後郷土資料館	鎌倉時代の丹波・丹後(特別陳列図録19), 特別展図録17農山漁村の女たち, 丹後郷土資料館報 第7号(1986)
京都府立山城郷土資料館	山城郷土資料館報 第4号(1986), 企画展資料5「発掘成果速報一昭和60年度の調査成果から一」, 特別展示図録5「山城町の歴史と民俗」
京都府立総合資料館	資料館紀要 第14号
(財)京都府文化財保護基金	京都の美術工芸 京都市内編 下
向日市文化資料館	第2回特別展示図録「よみがえる古代の文字」
泉屋博古館	泉屋博古館紀要 第3号
宇治市歴史資料館	「よみがえる古墳文化」, 昭和60年度宇治市歴史資料館年報
福知山市文化資料館	福知山市文化資料館資料収蔵目録 第2集(養蚕)
亀岡市文化資料館	開館1周年記念特別展示図録

学校法人 平安学園平安中・高等学校	左京七条一坊十三町平安京東市外町の調査
口丹波史談会	丹波史談 第121号
精華町の自然と歴史を学ぶ会	波布理曾能 第3号
石部正志	伊賀町文化財調査報告書3
井上定清	兵庫県文化財調査報告書 第32冊, 昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報
上野佳也	縄文コミュニケーション縄文人の情報の流れ
荻野繁春	摺鉢から見た中世の生産と流通について—西日本を中心に—
小山雅人	翡翠と日本文化を考えるシンポジウム 第1回ヒスイの謎—その輝き今—
菊地敏記	成田市の文化財 第16~17集
杉原和雄	解説目録 第8号「弥生人の暮らし」
関口功一	東国史論 第1号, 史跡上野国分寺跡発掘調査概要6
田代弘	日本歴史 第407号
鷓島三寿	史林 第65巻第4号
樋口隆康	日本人はどこから来たか, シルクロード考古学 第4巻 西域発掘誌
福山敏男	大阪市立博物館報 No. 12, 平安京跡 京都市埋蔵文化財年次報告 1976—I, 六勝寺跡 京都市埋蔵文化財年次報告 1976—II, 陶硯, 日本考古学の現状と課題, 三重県埋蔵文化財年報5 昭和49年度, 多気郡明和町古里遺跡・斎王宮跡, 斎王宮跡—範囲確認調査概要, 斎王宮跡—昭和52年度発掘調査概要, 保存の声 5~6, 埋もれた京都—地下鉄烏丸線内の遺跡調査—, 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館案内, 城陽市埋蔵文化財調査報告書 第1~8集, 龍谷 創刊号~11・13号, 特別企画展中国陶磁展
村田修三	週刊朝日百科 日本の歴史(通巻549号)

—編集後記—

今年も年末を迎え、あわただしくなりましたが、情報22号ができましたのでお届けします。

本号では、当調査研究センターの実施した弥栄町ゲンギョウの山古墳群と舞鶴市志高遺跡の調査を中心に掲載しました。いずれも、本年度の京都府北部の調査では、注目すべき遺構・遺物が見つかっています。また、資料紹介も2本掲載でき、本号も充実したものになっています。よろしく、御味読下さい。

(編集担当=土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第22号

昭和61年12月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
☎ (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
☎ (075)441-3155 (代)